

明治百年記念特別連続講座(最終回)

学長 太田耕造先生

回顧と前進

亜細亜大学
日本経済短期大学

学長

太田耕造先生

回顧 と 前進

は し が き

昭和四十三年（一九六八年）という年は、“明治維新”の明治元年から数えて、ちょうど百年目に当る年であった。わが国では、政府をはじめ各都道府県自治体その他各方面にわたって、全国的に祝賀行事が催されたが、本学においても、その前年、昭和四十二年の春から、翌、昭和四十三年の十二月におよぶ約二年間にわたって、全学あげての行事、「明治百年記念特別連続講座」が開講せられた。

この講座が開かれるに至った背景には、本学理事長・五島昇氏が、ある時、太田耕造学長に語られるには、「明、昭和四十三年には、わが国も明治百年を迎えることになるが、明治時代に発揮された先人たちのたくましいバイタリティー、すばらしい民族的エネルギーについては、今日の青年たちは、余りにも知るところが少ない。これは、まことに残念

なことと思うので、せめて亜細亜学園の全学生に、その具体的な内容を、なるべく体験的な角度から、印象深く聴かせるようにしたら、」ということであった。しかもその経費に関して、「学園の経済も目下決して余裕があるとは言えないので、別途その策を講じてあげたいと思うがどうか、」と言い添えられた由である（第一回実行委員会記録から）。

この五島理事長の御発意に対して、太田学長はいたく感激されて直ちに賛意を表され、あわせて両氏の畏友であられる毎日新聞社専務・田中香苗氏、東急ホテル社長・星野直樹氏、東急電鉄専務・松田令輔氏らの激励が寄せられる、などのことがあったということである。そしてやがて本学内に、この講座開催に関する「実行委員会」が設置せられるに及び、その具体化が急速に実行に移されるに至ったものである。すなわち、当時の役職名のままにその顔触れを記せば、左の通りである。この学内体制だけから見ても、教官・職員ともども、全学の機能を傾注してこれを成功裡に推進せしめようとした意欲が、十分うかがわれる。

実行委員（実行委員会代表）

実行委員（実行委員会代表）

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

実行委員

亜細亜学園理事長

亜細亜大学学長

毎日新聞社専務

東急ホテル社長

東急電鉄専務

亜細亜学園常務理事

商学部長兼短大部長

経済学部部長

法学部部長

教養部部長

就職部部長

図書館長

亜細亜学園評議員

亜細亜学園評議員

商学部教務主任

経済学部教務主任

（順不同）

五島昇	太田耕造	田中香苗	星野直樹	松田令輔	八木勇平	栗屋義純	半沢耕貫	中根不羈雄	夜久正雄	中山庚子男	今田竹千代	井上孚麿	中山優	杉本常	森田行夫	野沢浩
-----	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	-------	-------	------	-----	-----	------	-----

實行委員	教養部教務主任	久野昭
實行委員	教養部教務主任	浜口瑛
實行委員	教職課程教務主任	山口弥一郎
實行委員	學生部委員	関口甲子男
實行委員	學生部委員	深沢実
實行委員	學生部委員	神沢有三
實行委員	學生部委員	近藤達美
實行委員	學生部委員	西俣昭雄
實行委員(常任委員)	五島育英会事務局長	後藤浩
實行委員(常任委員)	總務部長	藤原繁
實行委員(常任委員)	經理部長	児玉廉平
實行委員(常任委員)	學生部長	永井正
實行委員(常任委員)	教務部長	稻葉昌幸
實行委員(常任委員、涉外担当)	學生部委員	小牧昌実
實行委員(常任委員、涉外担当)	同、短大教務主任	梶村昌昇
實行委員(常任委員、涉外担当)	學生部委員	小田村寅二郎
實行委員(常任委員、連絡担当)	總務課長	鯨坂芳文

この「講座」は、約二年間にわたって行なわれたものであるが、その開催された当日は、正常カリキュラムにおける第一時限の授業を三十分間短縮し、第二時限目の全授業を休講にし、全学生、全教職員が、これを聴講できるように、挙学体制が布かれた。当時の本学は、体育館が建設途上にあった時期であり、全学生を一堂に会せしめる講堂がなかったため、三一二番教室を会場とし、三十一番教室にテレビセットを、二〇〇番教室ほか各教室には、室内拡声器で実況放送をするなどの措置によって、この事業を開始したものであった。

招請をお願い申し上げた外来講師十四名の方々は、わが国良識を代表される方々ばかりであったが、御多忙の御日常の中を、本学のこの事業の趣旨に賛意を表され、渉外担当委員の御依頼に対し、つぎつぎに御快諾くださったのである。

というのも、この事業が開始された昭和四十二年という年は、四十三年、四十四年に全国を席捲した大学紛争が、ようやくその萌芽を出しはじめた時であり、全国の大学は、官公私立のいずれを問わず、学生と大学当局とのあいだに、微妙な対立、あるいは陰悪なに

らみ合いが出はじめた時であったので、本学のように、全学生、全教職員が挙学一致の体制で、このような長期にわたる事業を円滑に挙行し得ていた大学は、他にその例を見ることのできなかつたからである。お招き申し上げた講師の方々は御講義をされたあとで、いずれも「この大学紛争の渦巻くなかで、学生諸氏が実に熱心に聴いてくれてうれしかった」と洩らしておられたのも、ゆえあることであつた、と思われる。

以上のような経過のもとに、最終回（第十五回目）が、太田学長の「回顧と前進」と題して行なわれたのである。当時、昭和四十三年十一月は、全国的な大学紛争がエスカレートの一端を辿っていた時であり、翌年春の入学試験が不可能になる大学も出はじめた時でもあつた。しかし本学学生の良識はそれらの風潮に追隨するの愚を避け、熱心にこの講座を最後まで静聴し続け、亜細亜学園を、学問の府たるにふさわしい環境で守り通したのであつた。

いまここに、「明治百年記念特別連続講座」のうち、とくに本学学生の勉学の資に供するため、また、本学学生が今後も全国的大学紛争の中で毅然とした立場を堅持されるた

めの資として本書を刊行することとした。ついては外来十四講師の方々の御講義内容の上梓のことは、僭越ながらこれを他日に期することとし、取りいそぎ、本書の形式のようなことによつて、この講座の全貌を取りまとめ、あわせて、太田学長の講義を上梓して、全学生、全教職員ならびに関係者各位に差し上げることとなつた。外来十四講師の方々は、この間の事情を御了察賜わりたく念ずるとともに、一方、太田学長御自身は、「自分の話などは印刷する値打ちもないから」と固辞され続けられたのを、あえて「学部長会議」の議によつて御納得をいただいたものであることを附記させていただきたいと思う。一言「はしがき」を借りて事業の経過と本書が上梓に至つた理由とを記した次第である。

昭和四十四年十二月二十日

亜細亜大学
日本経済短期大学

学部長会議 識

目次

はしがき

明治百年記念特別連続講座	1
--------------	---

明治百年記念特別連続講座日程 2

記念講座によせて（五島昇理事長） 4

学生諸君に期待する（太田耕造学長） 5

明治百年記念特別連続講座要旨（第一回—第十四回） 6

回顧と前進	学長 太田耕造講師 35
-------	--------------

一、明治維新について 48

二、日本の近代化—憲法制定—について 56

三、日本の発展時代 64

四、第一次世界大戦..... 84

パリ平和会議について 90

五、第二次世界大戦(一) 104

日・独・伊三国同盟について 111

日・ソ中立条約について 117

独・ソ開戦について 120

欧米の対日嫉視政策と日・米折衝について 121

六、第二次世界大戦(二) 130

日本の終戦段階 138

カイロ会議について 144

テヘラン会議について 146

ヤルタ会議について 147

ポツダム宣言について 155

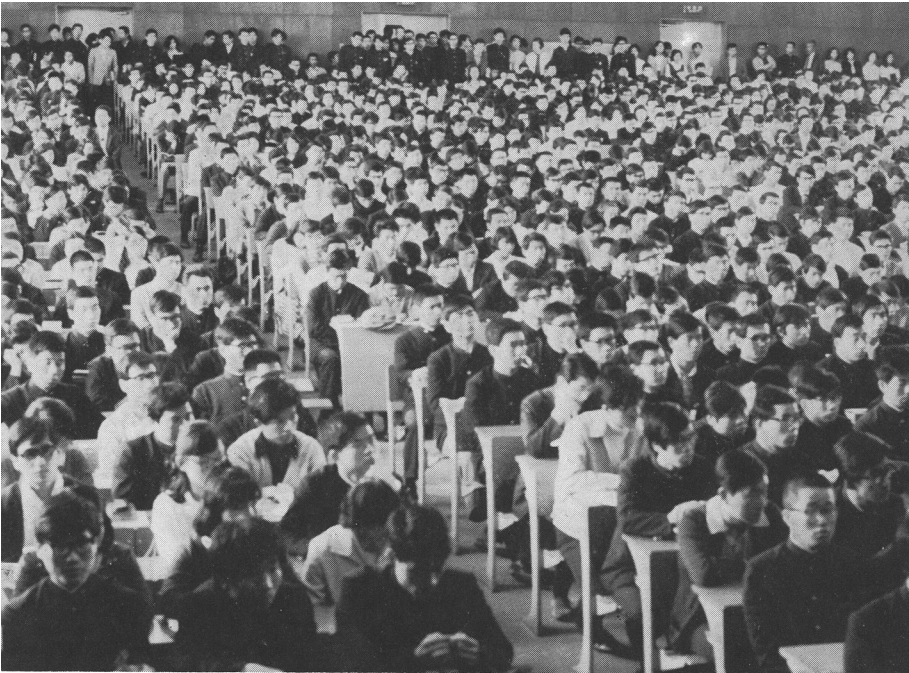
七、結語..... 161

□題字 太田耕造学長

明治百年記念

特別連續講座



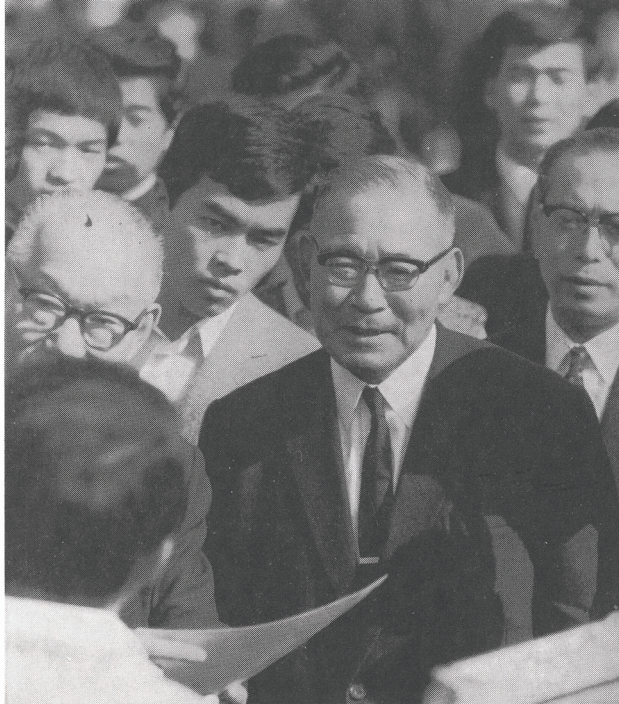


満員の講演会場



講演を終えて（第五回・今村均講師）

(右) 学生との歓談(第八回・永野重雄講師)
(下) 講演会場へ(第七回・小林秀雄講師)





学生新聞記者とのインタビュー(第十三回・出光佐三講師)

はるばる京都から(第十四回・岡潔講師)



明治百年記念特別連続講座

明治百年記念特別連続講座日程

- 第一回 昭和四十二年五月三十日
林 房雄講師
- 第二回 昭和四十二年六月九日
海音寺潮五郎講師
- 第三回 昭和四十二年六月二十二日
福田恆存講師
- 第四回 昭和四十二年六月二十八日
高坂正堯講師
- 第五回 昭和四十二年九月七日
今村 均講師
- 第六回 昭和四十二年十月三日
山岡莊八講師
- 第七回 昭和四十二年十月二十三日
小林秀雄講師

第八回 昭和四十二年十一月十五日

永野重雄講師

第九回 昭和四十二年十一月二十四日

江藤 淳講師

第十回 昭和四十三年一月二十二日

林健太郎講師

第十一回 昭和四十三年五月十五日

竹山道雄講師

第十二回 昭和四十三年六月三日

衛藤藩吉講師

第十三回 昭和四十三年六月十九日

出光佐三講師

第十四回 昭和四十三年十月十五日

岡 潔講師

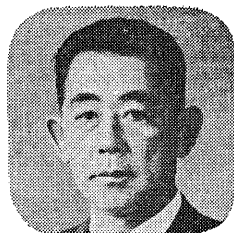
第十五回 昭和四十三年十二月六日

太田耕造講師

記念講座によせて

理事長 五島 昇

明治百年を記念して、教育の立場から、この百年を回顧し、諸君に日本民族の姿、ことに戦争後二十年間、敗戦ということ、置き忘れられていた日本の歴史の所産を知ってもらいたいというのがこの記念事業の目的である。



諸君は、この特別講座の中で、浮きぼりにされた多彩な人物の動き、あるいは社会現象を、諸君らが自分で整理し、自分

のものにして欲しい。

何故なら諸君らが今日、こうして生活しているのも、日本の永い歴史・伝統、ことに明治百年間、日本が鎖国から近代国家になるまでの先達の努力を抜きにしてはあり得ないからである。

これまでの百年間、明治の先達が築き上げて来てくれた社会を、諸君らが新しい若い眼で捉えて、社会に出てゆく何らかの「おみやげ」にして欲しいと思う。

学生諸君に期待する

学 長 太田 耕造

本講座開催の趣旨は、近代日本を築き上げた明治維新の真相及びその後の百年の歩みを学生諸君によく知っていただきたいということにある。

思うに明治維新は、確かに近代日本の扉を開いた夜明けであると思う。

永年に亘り我が国を暗黒化せしめていた公家政治・武家政治の弊風を打

破し、日本本来の姿であった君民一体制、これを復活し、これを基調として更にこれを発展せしめんとしたことが明治維新です。

本講座によって、日本復興の動力がどこにあるのかを究め、かつ波瀾万丈の明治百年の跡を偲び、もって多難なこれからの日本の前途に対し誤りなき方向と指針を知り、そして諸君の双肩にある第二の維新の成果を私どもは深く諸君に期待したいと思う。





第一回「日本民族の中核精神と明治百年」

林 房雄 講師

個人や国家には、中核性格 (Core Personality) とでもいうべきものがある。この中核性格はその国の伝統、歴史、風土などによって生れるもので、百年位を単位にした歴史では分らない永い時を経て形成されたものであり、この性格は、時に戦争の原因になるマイナス面にもなるが、人類の進歩向上の原動力ともなる。明治維新が、他国に例のない特色を持っているのもこの中核性格に由来すると思う。

吉田茂元首相は「エンサイクロペディア・ブリタニカ」の論文付録「日本を決定した百年」の中で、近代日本、特に戦後日本の復興の来源は、日本民族の「勤勉性と創意、それに祖先伝来の楽天性」にあるといっている。

【講師略歴】

作家。明治二十六年生れ。大分県出身。東大修。「大東亜戦争肯定論」「青年」「西郷隆盛」等著書多数がある。

私は、この他に日本人の誇るべき特質として「先憂性」つまり現状をみてこれは心配だと憂い将来に備えようとすると思う。

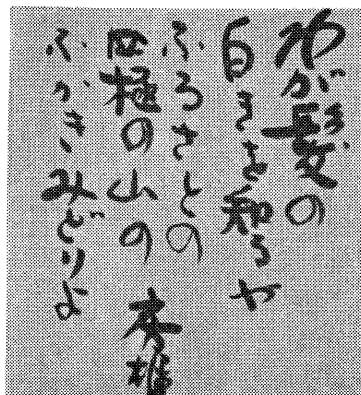
西郷隆盛の西南戦争も、結局この「先憂性」、つまり明治維新で折角外国勢力を食いとめたのに、その後の状態をみると維新の精神を忘れてしまっている。これでは外国勢力に滅ぼされるぞ、日本にもう一度正気を取りもどさせなければならぬ、という憂いであり、政権を

どうこうするというものではなかった。

こういった国民的性格コアー・パーソナリティに恵まれていることによって、西欧を驚かすような、日本の未来を開くことになり、これまでの多難な歴史の中で民族を救ってきたのだと思う。

そんな訳で私は日本人の持っているコアー・パーソナリティを信頼しており、日本の将来についても樂觀している。

(文責在記者)





第二回Ⅱ「維新人物論」

海音寺潮五郎講師

日本における政治・社会の変革は、古来より外国からの刺激によって起っている。大化改新もそうであるし、明治維新についてもいえることである。

明治維新の推移をみると、当初はペリーの来航など外国からの圧力に対して、幕府を強くするという日本強化運動という形で外国からの刺激に対応していた。また、薩摩藩の島津斉彬を中心とする公武合体論などの考えも一方にはあった。しかし、いずれの立場をとる人も、朝廷を大切にしなければならないという点では一致していた。

吉田松蔭が、長州の松下村塾で国の危急に際して、その処すべき道を青年に教えたのもこの頃で、一年ほどの短い期間ではあったが、伊藤博文など多くの

【講師略歴】

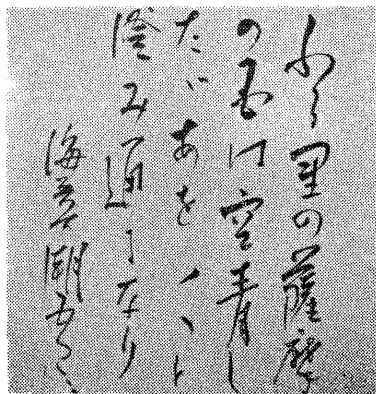
作家。明治三十四年生れ。国学院大高師卒。「天正女合戦」で直木賞受賞。他に「天と地と」「平将門」等多数の著作がある。

人材を輩出し、教育における魂と魂のふれあいの偉大さを教えている。

明治維新の先覚者が、維新で達成したことは、三百諸侯を有する連邦国家の日本を統一国家にして、日本に市民社会をもたらし、天皇と国民とが直接に結びつく社会を形成したということである。

維新の人物を通していえることは、この維新の動きが日本の存立・日本の国家利益のために「どうしたらよいか」という共通の足場の上で行なわれたということである。また明治維新の歴史は、試行錯誤を通じてその中から「維新」を生み出したものであり、決して、観念から導かれて「こうなる」といったような一見合理的な考えに立って行なわれたものではなく、極めてノーマルな人間の歴史であり、そこに、今日のわれわれの心を打つ感動と示唆に富んだ人の生き方を教えるものがある。

(文責在記者)





第三回Ⅱ「明治百年の反省」

福田恆存講師

明治以降の日本にとって、反省すべき一番大きな問題は、知識人と政治担当者との分離——知識人イコール反権力者という考え方の発生である。徳川時代あるいは明治の十年頃まではそうではなかった。つまり明治に入り知識階級イコール西洋の知識に通じる者、という考え方になったからであろう。

日本の現実を無視し、理想を外に求め自分達の支え、正しさの根拠を西洋に求め、自分達の良心の後循は西洋である、という考え方が明治・大正の知識人の生き方の基盤にあった。それ故、現実政治に対するあきらめ、無関心が日本人の知識層の中に生れた。このように常に先進国を外に求めて来た日本の知識人の姿勢には大きな問題がある。

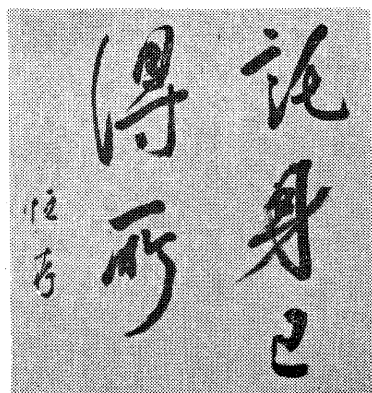
【講師略歴】

評論家・劇作家。
現代演劇協合理事
長。劇団雲主宰。
東京都出身。大正
元年生れ。東大卒。
「シエクスピア全
集」等著作多数。

われわれの身の囲りにあるもの、例えば洋服にしても建物にしても一つとして西洋の影響をうけないものはないように見えるが、その中には日本独自のものがある。それは、われわれが生れる前からあった自然と日本語それに日本の歴史である。国を愛するという基調もそこにある。日本人としての共同体意識を培って来た伝統が無視ないし忘れ去られていることに近代日本とくに戦後日本

本の考えなければならぬ問題がある。

最後に天皇の問題がある。日本の天皇は、英国などの王位とその性格が異なる。それは、日本では、文と武が分れていることに由来する。即ち文化の中心に天皇があり、武力は武家を持ち双方がうまくいつていた。この天皇の存在というものに対して日本人は左翼はこれを否定し、右翼はこれを神格化し、リベラリストはこれを避ける傾向がある。それでは問題は解決しない。われわれは問題を問題として見つめなければならない。（文責在記者）





第四回Ⅱ「明治外交の成功と失敗」

高坂正堯 講師

異質文明に対応する方法には二つの類型がある。一つはこの異質文明を借り入れようとするヘロデ派、もう一つは排しようとする狂信派である。

明治以降の歴史には大きな転換期があったが、明治維新はその意味で「外交」をめぐる最初の大きな転換期であり、ヘロデ派だけでも狂信派だけでもなく国の自主性を保持しこれを受け入れる形で進んだ。

第二の転換期は、征韓論の否定であった。これは政治の方向が内政中心・国力充実に向けられたことを意味する。

第三の転換期は国力の充実による不平等条約の改正であり、第四の転換期は日本の独立国としての地位を安定させた日清戦争、日露戦争の勝利であった。

明治以降これまでの歴史によってわれわれは多くを学ぶことが出来る。過去

【講師略歴】

京都大学助教授。
昭和九年生れ。京
大法卒。国際政治
学専攻「海洋国家
日本の構想」など
多数の著書・論文
がある。

における日本のジレンマは今日ほぼ解決がついている。すなわち、戦略上では朝鮮半島の問題もアメリカにより肩代りされ、科学技術の進歩により資源の不足がそれほど影響されなくなった。又輸送の問題も日本が島国であることが有利でさえある時代となって来た。

しかし、第二のジレンマ、われわれのシンはどこにあるのか、という精神的な面はまだ解決されていない。民主主義はまだ本物でなく明治維新以降、西欧文明の吸収に追われた結果、頭の良い人はシンがなく、シンのある人は頭が悪く、という現象が生れ、民主主義的な一人一人が本当に平等で自分の思ったことがいえるという行動様式が定着していない。カメレオンの人間が多く、いつになったら頭とシンが一致するのであろうか。近代日本がここまで成長した裏にいかにも多くの幸運があったかを忘れ、全て自分の力で来たように思い上る風潮が出て来た。日本は核武装すべきであるという人も、非武装でなければならぬという人も、日本が正しくさえあればやっていけるといふ考えの人も思い上りである。日本は、いまむづかしい時期に来ており、決していい氣にばかりなっておられる時ではない。心すべき大問題が未解決である。

（文責在記者）



第五回「日清戦役・三国干渉・日露戦争について」

今村 均 講師

日清・日露戦役は、東洋と西洋のこんがらかりであり、発端は阿片戦争に始まる。それまでのアジア民族は西洋の事をよく知らず、阿片戦争によって国際的環境の中で主導権をにぎる白人の気持を知ったのである。

幕末の日本は、このような国際事件を中国を通じて知りそれと同時に、自国の現状に対する改革が明治維新という形で現われた。

阿片戦争による中国の敗戦は列強の中国進出として現われ、特にロシアは、日本と一衣帯水の地にある国として、三国干渉を初め、朝鮮半島への進出を着々と進めていた。一方、日本は自己の内力によりこれらの列強進出に懸命に対処しようとしていた。

【講師略歴】

元陸軍大将。宮城県出身。明治十九年生れ。陸軍大学校卒。大正七年より十年まで英国駐在。昭和十七年ラバウル方面軍司令官。

ロシアの理不尽な南下政策は、弱小国とされていた日本にとって脅威以外の何物でもなかった。

国内の反露気運は、当時の朝野に充滿し、為政者はこの民衆の気運に対するに極めて慎重であつた。

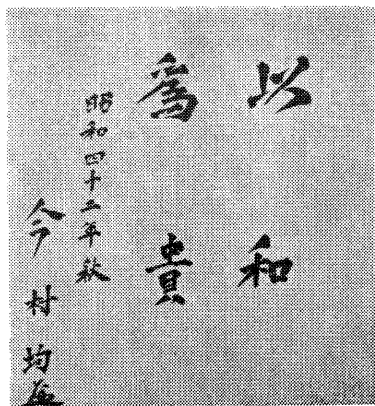
この日清・日露戦争を称して日本の「侵略戦争」という人があるが、これは当時の日本の置かれた立場を客観的にみない研究不足の人のいうことであると思う。

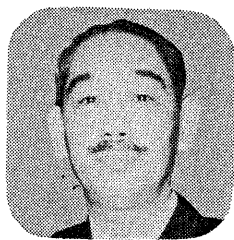
近ごろは青年学徒の中にも冷静な目で、過去の歴史を見ようとする人が現われて来たようであるが、大變に喜ばしいことだと思う。民族が興亡をかけるということは決して簡単ではない。

（文責在記者）

★今村均講師は、昭和四十三年十月四日、逝去されました。

謹んでご冥福をお祈り致します。





第六回Ⅱ「明治百年における日清・日露戦争の意義」

山岡 莊八 講師

歴史の見方には、たんねんに過去の事蹟を追う方法と何を求めてこういう動きをしたのか、という事を中心に従求する二つの方法がある。

過去の事蹟は動かないものだが、われわれの経験・勉強によって解釈の仕方が異ってくる。過去の事蹟と自分の個性がぶつかり合って絶えず新しい発見をしていく。これが歴史の面白さだと思う。

日露戦争後のいろいろな戦争を経験して考えてみると、それまで日本は野蛮な国で日露戦争後、世界に認められ西洋文明の勉強が出来たんだと考えていた。しかし今日になってみるとそうではない。日本の近代文化を咀嚼する力、即ち近代国家としての日本人の基礎は江戸時代に出来ている。

【講師略歴】

作家。新潟県出身。
明治四十年生れ。
著書に「徳川家
康」「八幡船」「明
治天皇」「太平洋
戦争」等多数がある。

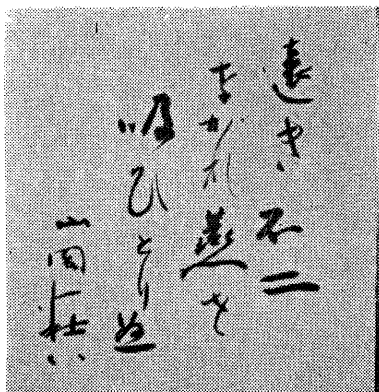
日露戦争の遠因は黒船の渡来、つまり西洋の東漸にさかのぼる。羅針盤の発
明以後、世界を自由に航行し自分たちの領土を拡張最後に取りところは日本だ
けになり列強の侵略対象国となったこと、近因はロシアの三国干渉、南下政策
による日本の保全維持という深刻な問題にある。

日露戦争の意義は、西欧によって地球が包まれてしまった時、一つだけ包み
きれない国が出来た、ということにある。も
し日本が包まれていたら日露戦争も大東亜戦
争もなかったであろう。

日露戦争時の国民一致の熱情、意気は、今
後のわれわれに多くの教訓を与える。

日本人はサムライで信用出来る、約束した
ことは守る国民だという気風はなくな
いと思う。

(文責在記者)





第七回「民族的個性を發揮した明治の文化」

小林 秀雄 講師

青年時代というのは人生で大事な時代です。その時にはそれが分らないがあとで大事だったなと思うものです。

諸君もやがて私のように年寄りになる。これは確実なことです。が、そういうあたりまえのこと、長続きのするもの、滅びないもの、そういうものが現代にあるのに、今の人はそういうことを考えなくなって来た。実に不幸だと思う。私は文化というものは、めまぐるしく変わるジャーナリズムの中にあるものではなく、かくれた大変微妙なものなかにあると考えています。源氏物語にしても、最初にその真価を見出ししたのは本居宣長であり、紫式部の時代を過ぎること八百年にして真価が認められたものです。

それまでの八百年続いた理由は、読んで楽しいからという子供のような気持

【講師略歴】

文芸評論家。文化
勲章受章。東京都
出身。明治三十五
年生れ。東大卒。
「考へるヒント」
「無常といふ事」
等著書多数があ
る。

からだけなのです。

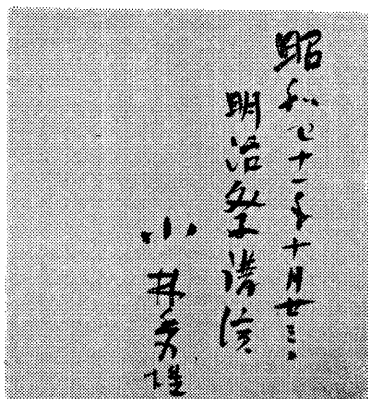
しかし、もし「源氏」がなければ、日本人の精神は変っていたでしょう。目には見えないが大変なものだと思う。

つまり文化の流れは、目には見えないが諸君の中にも流れ、かくれたところにある。親子、恋愛の中にある。みんな私事（わたくしごと）であり、それぞれの資質につながるものです。

友達の自分と自分の自分がぶつかって劇ができ、その中から得るものは自覚しないが、それを表現しなくてもその中から得ている。その重なりが文化を作っている。その目に見えないものが文化の原動力なのです。

現代は大言壮語が多すぎるが、そこに文化的・人間的なものはないと私は思います。

（文責在記者）





第八回 Ⅱ「明治の実業家精神——士魂商才」

永野 重雄 講師

明治百年の日本歴史の流れは、車で例えれば維新でエンジンがかけれ第二
次大戦でエンジンが止まり戦後に続いているように思う。これから又強力なエ
ンジンをかけなければならないが、それは諸君ら青年の力に期待するところ大
である。明治百年を省みて良いところは引継ぎ改めるべきは改めて今後の糧と
しなければならない。

明治維新が成し遂げられた過程をみると日本以外にもっと大きな世界のある
ことを知った事に一番大きな要因があると思う。

この百年色々な出来事があったが、日本人が本当の意味で世界を知ったのは
第二次大戦以降であるように思う。現在の世界にある自由主義国家群と全体主
義国家群の問題もその意味でより大きな視点から見ることによって新たな進展

【講師略歴】

富士製鉄社長。日本商工会議所会頭等要職多数。広島県出身。明治三十三年生れ。東京大学政治科卒。

が期待出来るように考える。あるいは米ソ両陣営にその契機を与えるのは日本人に課せられた義務かも知れない。

今日、世界の中での日本の地位が著しく高くなったが、これは、経済・国力の進展もあるが、何よりも日本のバックにアジア十数億の民族がひかえてい、ということにある。アジアの国から日本が尊敬されるように、また日本は

アジアの諸国に自分の力の最大限をつくして協力しなければならぬと思う。

国内的には日本の発展に伴う広域行政の確立（府県制の廃止）、国外的には貿易・資本自由化の問題があるが過去の百年を模倣、文明導入の百年とするなら、今後の日本は、自身の頭と身体で自分の力で伸びていかなければならない。世界の一員として遅れをとらぬよう努力していかなければならないと思う。

（文責在記者）

人盡如流水

永野重雄



第九回 Ⅱ「明治から大正に移る際にみられる政治・

思想・文化の諸動向」

江藤 淳 講師

明治日本の国家目標は、西欧列強と対等の国際的地位を獲得する、ということにあった。つまり西欧に対して日本の文化が何ら遜色のないものであり対等の地位を追求し得る高いレベルをもつものであるということを内外に表明する事であった。安政の和親条約以来不平等条約に苦しんだ日本が名実共にその国家目標を証明し得たのは日露戦争の勝利による。しかし証明するまでは努力目標があるが、達成されてしまうと経済的には苦しいが心理的には弛緩し、夜郎自大になる。そして自身の置かれた国際的な立場の脆弱さを忘れ不満が国内内向する。

その結果、維新以来あった、国家とともに自分が生きる、という考えから、国家とは別に自分の生き方を求めるエゴイズムの考え方がでて来る様になった。

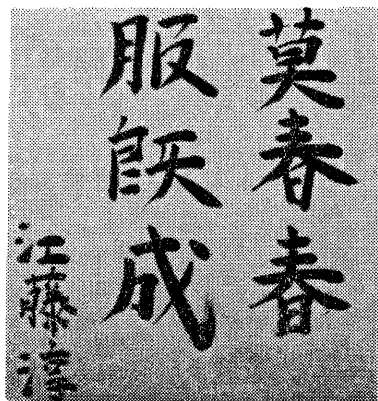
【講師略歴】

文芸評論家。東京都出身。慶大卒。昭和七年生れ。「小林秀雄」によって新潮社文学賞受賞。その他著書多数。

明治四十一年の戊申詔書、明治四十五年の明治天皇の崩御に至って時代の行きづまりが象徴的に現出した。この天皇崩御と乃木大将の殉死が更に時の知識人に大きなショックを与えた。森鷗外作品がこの時以後時代小説だけに限られるようになったり、夏目漱石の「こころ」が出現したのはその間の知識人の動揺を浮きぼりにしている。明治天皇の崩御と乃木大将の殉死は、その精神の

終焉であり近代日本歴史の転換期がこの頃あったように思う。それ以降現在まで日本ではエゴイズムの盲目的肯定に堕し、人間が限られた価値の中に自分を燃してこそ、本当に最高の自己認識が出来る、という事を忘れてしまった。明治の精神とは、自分の欲望から出て自分の欲望に帰る自分の精神を罰することの出来る精神であったことを、今日の我々は再び想起すべき時期にあると思う。

(文責在記者)





第十回Ⅱ「第一次世界大戦における日本とその後の

大正時代の日本」

林 健 太 郎 講 師

大正時代というのは暗くて悲劇的な時代であった。これは日本だけではなく、西洋にとっても同じであった。何故この時代が暗いかというと、国内的には、明治天皇の崩御、明治の偉大な時期の終りで、反面日本の新たな出発をしなければならぬ時代であった。

そういう大切な時期に第一次大戦による一時的な好景気、あるいは社会思想的に欧米の思潮が流入した結果、日本が考えなければならぬこと、しなければならぬことを検討せずに過ぎて来てしまった。

一方西欧でも第一次大戦が起った結果、今までヨーロッパ人の、自分達が世界の中心であり、西洋文明だけが世界で唯一の文明である、という考え方がく

【講師略歴】

東京大学教授。東京都出身。大正二年生れ。東大卒。著書は「世界史と日本」「ワイマル共和国」「歴史の流れ」等多数がある。

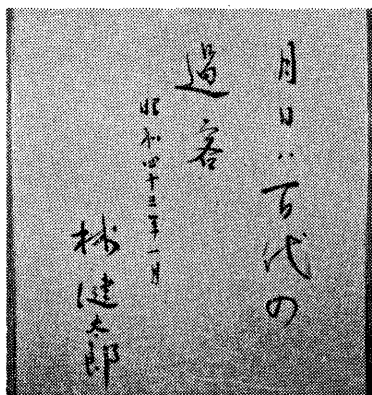
ずれヨーロッパの一体感がなくなり、社会的な安定・キリスト教文明の有効性が内部から薄れ、没落意識が出て来た。その後日本は第二次大戦に突入し、ヨーロッパでは、共産主義国家の出現・ヒットラーの登場というように世界が混乱してしまった。

過去の日本は、機械文明を自己のものとし、西欧人の、キリスト教文明が背景でなければそれを咀嚼出来ないという考えを打破して、物質的な機械は、国家・文化を超越するものであることを証明した。

日本には、仏教・儒教等様々な東洋文化が存在しているが、これからは機械文明とこの東洋文明との結合、統一という役割をはたすべく、自覚し進まなければならない。

そして、その意味で現在の日本は、世界の中での位置役割を十分考えねばならぬ時に到達していると思う。

(文責在記者)





第十一回「日本と欧米の学生運動の思想」

竹山道雄講師

日本の学生運動は、今日からみると世界の中でもは、い、ともいえる運動として昭和二十五年頃から始まり、昭和三十五年の日米安保条約をめぐる反対運動で驚くような盛り上りを見せ、現在に至っている。

従来、この学生運動は、いわゆる後進国に発生する一種の特殊現象のように考えられていた、というのは、先進国では、全般的な知識水準が高く社会が学生の不満を吸収してしまうから発生する余地がないと思われていた。

しかし、ここ二、三年、ヨーロッパでも大変な思潮の変化が起つて来た。それらの思想の根底には、マルクスズムがあるが、それを援用しながらも、日本で行なわれていることとは異なる観点から新しい理論づけが行なわれている。

【講師略歴】

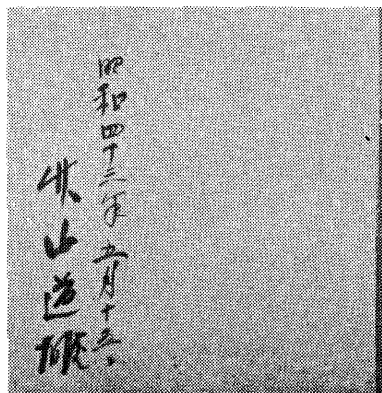
作家・評論家。静岡県出身。明治三十六年生れ。東大卒。一高、東大教授を歴任。「ピルマの堅琴」「昭和の精神史」等著書多数。

例えば、西ドイツで学生運動の大立物といわれるドイツユケなども東ドイツから西ドイツへ逃れて来た人物であるが、従来なら共産主義に抗して亡命するというケースが殆んどであったが、彼の場合は、東ドイツの共産主義は本当の共産主義ではなく、西ドイツの言論の保証された中で本当の共産主義、無制約な空想的ユートピアの実現を主張している。

即ち、旧来のマルクス・レーニン主義の下にある社会体制に対する反発が、共産圏の青年にある、ということである。

このように国際的な相互影響力が強まっていることから、戦後日本から出た学生運動が、欧米の中でも起り、いずれはそれが日本に返ってきて大きな影響を与えるであろうことが、予想されるのである。

(文責在記者)





第十二回「明治百年における日本とアジア」

衛藤 藩吉 講師

われわれが生きているこの現代は、史上稀にみる大変な時代であるようだ。第一に問題となるのは、核の問題であり、第二は、人口爆発、第三はレジャ―の問題である。

まず第一の核の問題であるが、最終兵器の出現という意味で人類の歴史上かつてない深刻な状況をもたらしている。

完全防禦の手段がない、ということが、アメリカ・ソ連の核哲学を確立させている。しかし、中共については、まだその点で疑問符が多く今後の問題として残されている。

人口爆発の問題は、特にアジア・アフリカの開発途上国に著しく、二〇〇〇

【講師略歴】

東京大学教授。大正十二年奉天生まれ。東大卒。著書に「近代中国政治史研究」「東アジア政治史研究」等多数がある。

年には六十億人に達するといわれている。この人口爆発は同時に食糧問題としても世界の将来に大きな影響を及ぼすと思われる。従って日本のアジア地域への経済援助もその意味で農業援助を最優先に行なうべきであろう。幸い日本人は人種的にも、物の見方、考え方からもこれらの地域に出来る部分が多い。

最後にレジャーの問題であるが、実はこれが一番やっかいな問題といえる。

最近の学生運動にしても、時間が十分あることに大きな原因があるようにさえ思える。

これからの二十世紀後半で日本が世界に何らかの新しい役割を果せるとしたら、東南アジアに我々の技術を与え、彼らと同じ条件で働き、生活することからであろう。

若い時代に、もっと世界を知り、基礎となる実力をつけるために、一生懸命勉強すべきだと私は思う。

(文責在記者)

秋風躍馬
入蕭關

昭和四年五月三日

衛藤廉吉



第十三回「日本人の世界的使命」

出光佐三講師

現代の世界を見るとまさに行きづまっている。その原因は、権利の主張、権利抗争にあると思う。権利抗争の結果、譲ることを知らない対立が生じどうにもならない様相が生れている。

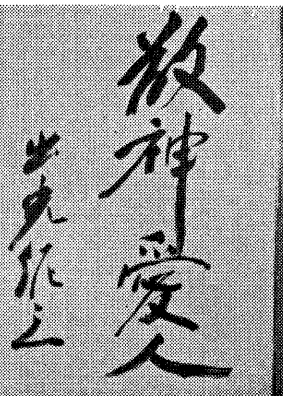
この状況を救うのは、徳の力、即ち和をもって尊しとなす、日本人の生き方であると思う。徳の力は外国人に分らないものではあるが、日本人の世界的な使命もこの対立抗争のゆきづまりの解決となる日本の思想を世界の人々に指し示すことにあると思う。対立抗争の思想が何故起きたのかを考えてみると、権利思想が我欲の思想だからである。一方、日本人が昔から持っていた無私思想は、克己し誰れにも劣らない力をつけ、それを自分のために使うのではなく他人のために使う、ということにある。つまり日本人の生き方の根本には「無私精神」があるということである。

【講師略歴】

出光興産(株)会長。
日本工業倶楽部監
事。明治十八年八
月生れ。神戸高商
卒。元貴族院議員。
イラン国ホヌイヨ
ン勲章受章。

近年アメリカの経営が行き詰っているといわれるのも、人間以外の条件によつて能率を上げようと思つているからだと思う。人間を尊重し、自らの気持ちよつて自発的に働く、自分の仕事に生甲斐を感じて働くという社会にすることが大切だと思う。

無私の精神を象徴するのは、日本の皇室であり、その質素な生活は外国人の訪問者を驚かせる。彼らの頭にある王様、皇帝からは考えられないのであろう。



外国にはモラルという言葉があるが、これ

は日本という道徳とは違う。真心から自然に湧き出るものが道徳であり、外国人には、日本人のような無私の精神、恩あるいは義理人情、そこから来る互譲互助の精神はない。これは彼らにはどうしても理解出来ない。「譲る」という考えそのものが罪惡にとられる。

なかなか困難ではあるが、日本人の生き方、考え方を自信を持って実践によって教えていくことが必要だと思う。
(文責在記者)



第十四回「日本人のころ」

岡 潔 講師

仏教では、心の一番奥底にあるものを第九識という。これは一面ただ一つであり、他面一人一人個々別々という関係を持っています。

次にこの第九識に依存して「時」があります。これを第八識といい、その人の過去の全てが保存されています。次に第七識という大小遠近彼此の別―大小遠近は空間で、彼此は自分と他人の区別―が現われます。この第七識が形を現わしたものが「自然」であり、その一部がその人の肉体です。そして本当の自分というのは個で真我です。しかし、人は五尺の身体を「自分」と思いがちですが、この五尺の身体のこととは小我といえます。

例えば、芭蕉の有名な句に「秋深き隣は何をする人ぞ」というのがあります。が、この句について芥川竜之介は、茫々たる三百年、この莊重の調べをとらえ

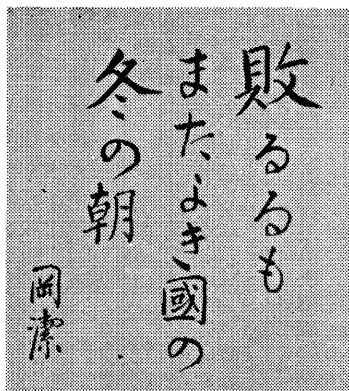
【講師略歴】

奈良女子大学名誉教授。明治三十四年和歌山県生れ。京大卒。文化勲章受章。著書に「風蘭」「月影」等多数。

たのは芭蕉一人あるだけだといっています。しかし、芥川は、情緒の色どりを全く見間違っていると思います。芥川は、この句は人の世の底知れぬ寂しさを詠んだものと思ったのです。明治以降の日本人は、自然科学をもととした物質主義しか教わらなかった。だから芥川も自分といえ、小我の自分のことしか思わなかった。小我を自分と思うと人の世は一人一人個々別々である人の世となる。

そういう人の世は分ってみれば底知れず淋しい。しかし、これは小我と真我の非常に大きな違いです。芭蕉は真我の人です。だからこの句は、隣りの人を知らないが故になつかしいという秋が、江戸の八百八町を覆って深々と来ている、というのが本当の意味です。いま日本は、形式は折角よくなっているのに世の中がさっぱりうまくいっていない。これは、真我と小我とを理解していないことから来ています。

(文責在記者)



以上の各ページに掲載させていただきました諸先生の「色紙」は御講義の終わりましたあと、本学学長応接室において暫時御休憩くださいました折に、特にお願ひ申し上げまして御来校記念に御執筆をいただいたものでございます。

ここに謹んでその旨を御紹介申し上げます。

明治百年記念特別連続講座 第十五回

回顧と前進

亜細亜大学 学長 太田 耕造 講師

司会（稲葉教務部長）ただいまより特別連続講座の第十五回を

開催したいと思います。本日は最終回でございますので、本学の学長太田先生に、「回顧と前進」と題しましてご講演をいただくわけでございますが、講演に先立ちまして、小田村先生から学長につきまして簡単な略歴等をお話いただきまして、それから講演にはいつていただきたいと思います。

紹介（小田村委員）いまさら申し上げることもございませんが、本日、太田学長先生がお話下さる内容と先生のご経歴とは多少関係があると思いますので、先生のお話を一層よくお聴きするのに参考になればという意味で、ひと言申し上げることにいたします。

先生は明治二十二年にお生まれになっていらっしゃいます。したがって、ことしで数え年、八十才になられますが、大変お元気で矍鑠かくしゃくとしていらっしゃいます。

太田先生は、大正九年に東京帝国大学（今日の東大）の法学部に当たる法科大学英法科をご卒業されまして、直ちに東京地方裁判所所属の弁護士に登録をなさいました。昭和になりましたから昭和十

三年には、法政大学の教授をなされ、その翌年、昭和十四年一月に平沼騏一郎男爵が内閣を組閣されて、総理大臣になりました時に、内閣総理大臣の筆頭秘書官として、総理の側近に参画されました。その同じ年の四月に、平沼内閣の一部改造がございまして、内閣書記官長になりました。（今日それに該当する職務としては官房長官の更に少し格の上のもののご判断下さればよろしいかと思います。）

その年の八月に退任されて、貴族院議員（今日の参議院議員に該当）になりました。以後、昭和十六年に、亜細亜大学の前身である興亜専門学校の設立に参加されて、爾来本学との関係は今日まで続いておられます。即ち、約三十年近い年月が、先生の歩みとともに、本学の創立以来の歩みとなっております。その間、昭和二十年四月には、終戦時の鈴木貫太郎内閣の文部大臣に就任なされまして、終戦の年である同じ年の八月に、鈴木内閣が総辞職するまで文部大臣としてご在任なさったわけでございます。

どうかご静聴を煩わしいと存じます。（拍手）

第十五回講座―「回顧と前進」

亜細亜大学学長 太田耕造 講師

明治百年記念特別連続講座は、昨年の五月三十日に開かれまして、林房雄先生の第一回講座を皮切りといたしまして、十月十五日岡潔先生の第十四回講座に至る特別連続講座が続けられた次第であります。この辺で一応の終止符を打ちたく存じまして、本日は第五回講座といたしまして、私から明治百年を通じて、つまり百年のあいだの全史を顧みまして、日本の迎って来た足取りの概観を皆さんの前に述べたいと思います。

本講座が開催されました趣旨については、のちほど詳しく申そうと思いますが、第一次世界大戦時のイギリスの外務大臣を務めました人に、サー・エドワード・グレーという人がいます。その人は、外交手腕において優れておりましたが、その人格、学識においても得がたい人物であります。そのエドワード・グレーの申しました言葉に、個人でも国家でも、歴史の教訓は、「学ばなければ滅びる」、ラーン・オア・ベリッシュ、すなわち歴史

の教訓を学べ、学ばなければ個人でも国家でも滅びると申しました。これは名言であります。このことを先ず諸君は心に銘じてほしいと思います。以下私は「回顧と前進」という題で諸君に話をしようと思うのですが、前述したようにこのエドワード・グレーの「歴史を学べ、学ばなければ滅びる」という警世の言をよく諸君が胸にたたんで私の申すことを聞いてもらいたいと思います。

さて、これから私が諸君の前に述べようとする明治からの百年全史を、私なりに大きく五つにわけて話をします。

第一は明治維新です。これは王政復古の^{かんぱつ}大号令の渙^{かん}発と、その精神に基づいて定められた国是である「五箇条の御誓文」、これを第一に述べます。

第二は日本の近代化ということ、即ち憲法制定の経緯を申します。

第三に日本の発展時代、すなわち日清戦争、日露戦争の両戦役及びその世界史的意義について述べます。両戦役は、アジア並びに世界に大きな影響を与えておりますが、この日清戦争と日露戦争とそれから、これと関連があります日英同盟を第三番目に申し述べます。

第四番目に第一次世界大戦を申し述べます。日本と英米、ことにアメリカとの関係について申し述べますが、時局は内外の急迫にせまられ、ついに止むを得ずして行なった満洲事変と、その意義について、諸君に是非この際しっかりと認識していただきたいものがあります。満洲事変は、やがて支那事変に発展するわけですが、先ず満洲事変の意義につきまして申し述べます。

第五は、その次に起こりました第二次世界大戦。その終戦段階にはいりまして、ポツダム宣言受諾ということになるわけです。

以上五つの題目につきまして諸君に話をしたいと思いますが、世界大戦の史実に就ては本学田村幸策先生の著書に負うこと多大であります。

これから順序といたしまして、明治維新期に現われました日本復興の原動力について少しく触れてみたいと思います。明治からの百年史を通じまして、先ず顧みて思うことは、明治の開幕期に当りまして、新しい日本を開拓するために挺身したわれわれの先覚志士たちのことです。この先覚たちが、後進の私どもに対して示してくれた教訓を、われわれは

深く思わなければならんと思います。それは、日本人の持つべき国体精神、これはのちに申しますが、それから道義心。そしてこれによって日本の進むべき方向を辿るべしというのが、先覚志士たちが私どもに残してくれた教訓であります。そして、いま申しました維新の先覚志士たちがわれわれに残してくれた教訓を、しからばどうして活かすべきか、私はこれは国家の持つ使命觀に徹することにあると思います。国家の持つ使命というのは、大きく分けて三つあると思います。

第一は、国家には必ず国民生活の精神的拠点というものがあるわけでありまして、これを明確にし、これによって国民の道義心を高揚すること。そして国民の統一を期し以て国民の不断の前進・発展の動力たらしめるということが第一点です。

第二点は、国民生活の充実を計ること。

第三点は、国民生活の安全を期することです。

そして現時点の日本におきまして国家の持つ使命觀を打診いたしますと、いまの日本は、国家はその持つ使命のうちの第二の国民生活の充実を計るという点だけを期しており

まして、その經濟發展では、國民總生産から見ますと世界第二位に位しておるとかいうことが揚言されまして、ますます第二の目的達成に努めているのが現状であります。そして第一の國民生活の拠点である国體精神の維持高揚、それから第三点の國民生活の安全という問題につきましては、関心を払うことが頗る薄いのであります。第一の問題である國家及び國民生活の精神的拠点の問題は、國家及び國民の興亡の基本問題に触れるわけです。これは、各論と申しまするか、これから以下申し述べる隨所に出てくる問題でありますから、これをここでしばらく省略いたします。

第三の國民生活の安全ということにつきましては、政府も國民も、故意にこの問題を避けて通るような感じがいたしますことは、まことに不思議であります。國民生活の安全問題と申しますのは、国防問題ということであります。なぜ国防問題という大切な問題が、このように政府からも國民からも嫌がられ忌避されておるのであるか。これはわが政府ならびに國民が、現実の國際情勢の動きについて全く無關心なのか、あるいは無知盲目なのか、あるいは内心卑怯卑劣なのであるか、そのいずれかによるものであると私は思いま

す。

ドイツの有名な戦術・戦略の大家でクラウゼウィッツという人がおりました。このクラウゼウィッツの申しました言葉に、「征服者というものは、常に平和愛好者である」というのがあります。つまり、外国を征服しようという野心家は、常に平和愛好者のような言動を弄しながら相手方を征服するものである。こういうのがクラウゼウィッツの説明であります。レーニンも毛沢東もクラウゼウィッツの有名な研究者であり、かつその戦術・戦略の実行者であることは、世界周知のことでもあります。一人とも口では平和、平和ということを盛んに唱えておりますけれども、同時に平和とか中立とかいうのは、ブルジョワの日和見主義である、偽善である、第三の道はないということも言っておることは、諸君も本で読まれておることを思います。現にソ連では一九五六年、ハンガリーの中立要求に対し、これを銃砲で蹂躪したことは周知のとおりであります。いま問題になっておるチェコの歴史を見ますと、一九四七年、マサリック大統領、ベネシュ外相は、中立政策を取り、ついで対ソ関係で親ソ、つまりソビエトに対しては親善関係を取ったのですが、結局これがため

ソビエトに滅ぼされて今日のチェコになったのであります。また、先年やめさせられたフルシチョフなども、「平和共存などはない」、ということを言っていることは有名であります。一九五二年七月に、イタリアの左派社会党の首領のニンニがスターリンと会談した時に、スターリンは、ロシアの政策は「戦争にも非ず、平和にも非ざる（ノウ・ワー・ノウ・ピース）長期政策である」と語ったことも有名です。これらをもってみましても、これらの肚の裡はよくわかるわけです。マルクス主義は日本では流行の花ざかりですが、そのマルクスは一八六七年こう喝破しておるのです。「ロシアの基本政策である世界支配政策は不変である。変るのはこの世界支配政策を遂行する方法、即ちメソッド、戦術すなわちタクティクス、それから（手練手管とでも申しますか）、マヌーバースで、これは変わるけれども、基本政策の世界支配政策は変らない」とマルクスはこう言っておるのです。

現代の世相を見ますと、表面はうまいことばが流行していますけれども、実は戦国乱離の世相であります。即ち、各国は外交的口上では非武装とか、平和とか、中立とか、協調とか、いろいろ甘いことを唱えておりますが、現実には強力な軍勢力を背後に持って、

武裝、武力で干渉、暴力、侵略主義に徹しておる、いわゆる大国主義と申しますが、これが現実でありまして、チエコ事件は雄弁にこの事実を語っております。フレデリック大王は有名なプロシヤ王でありましたが、彼は「武力なき外交は楽器なき音楽の如し」といったことがある。極端な言ですけども、この言が全く死語となつたかという、必ずしもそうばかりではないのであります。こういうことから考えまして、自力で自国を守る、このためには必要な武力はどうしても必要だ、ということ、世界の常識になっています。スイスでもオーストリアでもスエーデンでも、所謂中立国いわゆるであります、その中立を守るために自力の国防力、武力というものを持つておるということは、諸君もよくご承知でしょう。それですからスイスは完全中立といつておる、またオーストリアは武裝中立ミタリイ・ニュートラリティといつてゐる。つまり中立国においても、中立を守るためには外からの力の干渉を排除する自力を持たなければ、中立は守れないということなのです。

しかるにわが国の憲法を見ますと、いわゆる「平和憲法」といわれていますが、その前文におきまして「われらの安全と生存」はこれを「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼

して「保持」しようと決心した、と記してあります。つまり日本国民の安全と生存は他国民の御意のままに任^{まか}せる、こういうのが憲法の規定なのですが、こんなおめでたい国民は世界のどこにもないのです。こういうことで本当に日本の安全というものが守れるのか、否^{いな}々こんな他力本願では到底守れない。このような他力本願でわれわれの安全は絶対に期し得ないというのが、私どもの確信なのです。

本学の先生である原祐三先生が最近ある所で講演しておられますが、その中に、あるドイツ学者の日本観、日本をどう観てるかということを紹介引用しておられます。そのドイツの学者の言葉はこういうことなのです。「ドイツ人の感覚からいってどうしてもわからないことが一つある。それは何かというと、貧乏人なら国の守りというのはいらない。誰も狙^{ねら}うものがないからだ。だんだん金持になって国が富んで来る、強くなってゆけば、どうしても国の守りをやらなければならない。ところが日本の政府には、国家・国民の安全保障を自力でやるという気概も見えないし、そういう世論づくりをやらうという気配も見えない。ことに日本の青年はことごとく反戦反軍の思想を進歩的思想の如く心得て、いまや経

濟面からいえばドイツを負かしてアメリカに迫ろうという国民が、自分の国を守ろうという氣慨がないのはなぜだろうか。これがわれわれドイツ人の感覺ではどうしてもわからない点である」、これがドイツの一学者の日本觀であるということを、原先生がある所で紹介しておるのです。ズバリ直言、一言弁解の辞もない。われわれの痛いところを直指しておるのです。私がこれから述べる明治百年史に觀られるわれわれの先覺先達の國家觀と自衛手段に、私どもは思いをいたしまして、深い反省が要求されるものがあると思います。少し長くなりましたけれども、これは全編を通じての日本の思想的動力でありますから、くどいようですけれども前奏曲として申し述べたわけです。

一、明治維新について

これから各論にはいるのですが、第一点の明治維新について。これは、王政復古の号令とその施政の綱領となった国是五章の決定すなわち「五箇条の御誓文」ということになるわけです。

当時の江戸末期の世相を観ますと、墮落、贅沢、文弱となり、人心は萎靡不振に陥り、大名諸侯は財政が欠乏し、そして綱紀が弛む、武士の地位というものもだんだん落ちる。しかも形だけは昔の形骸を守ろうとする。ここに革新の気分というのが動いて来たわけなのです。この時加うるに外においては欧米勢力がだんだん東へ東へと伸びて来る。そしてその背後には軍隊がおる。堅艦巨砲といいますが、鉄製の軍艦、大きな大砲を控えて、日本に対して開港を迫った。浦賀に来たアメリカのペリー提督も堂々とした艦隊を率いて来たわけです。それから壹岐、対島などでは、ロシアの兵隊が上陸しこれを支配す

る。イギリス・フランスなども負けないで日本に対し兵力をバックとして迫って来た。非常な危急の時だったわけで、内憂外患こもこも迫るということでした。

この時決起したのが、維新の先覚者であったわけです。維新の先覚、志士は、日本の歴史伝統に目ざめまして、この危局を乗り切るには先ず民族の統一をしなければいけないということに気が付きまして、これがために兵馬の大権を朝廷に収め、閥族政治、武門政治を打破する。そして天皇親政を復活し、万民輔弼ほひの政治というものを断行した。これではじめて国家の大生命というものがここで蘇よみがえった。即ち復古と維新です。伝統と発展、あるいは回顧と前進ということがここに出て来たわけです。これは見事な歴史的現象で、空前の盛挙だったわけです。

当時の明治維新の志士たちの樹てた道標・標語は、ご承知のとおり尊皇攘夷ということ、この尊皇攘夷は、明治維新転換期の眼目であったわけです。

尊皇というのは王室を尊敬する、むしろその意味であります、同時に幕府を討滅するという意味でもあります。攘夷というのは、むしろ夷狄いてきを攘はらい却しりぞけるということでありま

すが、同時に外国と対等のつきあいをするということで、今日の言葉でいえば自主外交を現わしているということになるわけです。吉田松陰先生の遺書に、こういうことが言われています。

朱子学、陽明学一辺のことには何の役にも立不申候（朱子学、陽明学だけではなんの役にも立たない）。尊皇攘夷の四字を眼目として何人の書にても何人の学にても、その長ずるところを取るようにすべし、本居学と水戸学とは、頗る不同あれども、尊皇の二字はいづれも同じ。平田（篤胤）はまた本居（宣長）とも違い癖くせあるところも多けれど好著あり、云々、と言われております。これは明治維新の眼目を打ち出したものでありまして、今日においても味わうべきことと思ひます。

明治維新の過程の順序を申し上げますと、

第一に大政奉還ということがあります。これは徳川将軍が慶応三年の十月十四日に、今まで自分が持っておった政權を朝廷に返還し奉った、という大変なことです。これは主として土佐藩の山内容堂やまのうちにやうどうその他によって唱となえられたものが実現されたもので、大政を天皇に

奉還し奉ったものであります。これが第一です。

第二は王政復古の大号令、これは次に申します。

第三は版籍奉還、大名はみな藩というものを持っていました。明治維新になりましたも藩知事とかいって、藩籍をもとのままに持つておったのですが、これを天皇にお返しした。

そして最後に廃藩置県、即ち藩を廃して今日のような県制を日本全国に布いた。およそこの四つの過程を通して明治維新が実現したわけです。

だいたい日本国民は、昔から皇室に対して一つの信念を持つておったのです。それは、われわれは同一種族で、皇室は総本家である。皇室はわれわれの君主たるとともに族長である。そして義は君臣、情は父子。こういう関係であるという信念を持つておったのです。しかるにこの日本国民の特殊性というものが、蘇我、物部ものべの閥族政治、藤原の外戚政治、源平の武家政治、徳川の封建政治、こういうものが次々続きまして、日本建国の本当の姿というものは失なわれて来たわけなのです。これを日本建国の古に遡いどよって、本来の

日本の姿に返そうとしたのが、明治維新の志士たちの考えでありまして、王政復古の大号令は、この思想を現わしたわけであります。かくて明治史の第一頁というのは、この思想を帯びた王政復古の大号令から発しておるということを、先ず諸君は考えて貰いたいと思います。

王政復古の大号令の渙発は、慶応三年の十二月九日であつたのですが、これは前にも申しましたように、また明治維新の大精神が示していますように、摂政とか、関白とか征夷大將軍とかいうような、皇室と国民との間に挟まっていた中間勢力を一廃して王政を古に復する、つまり神武創業の始めにかえる。そして広く公議を尽し天下と運命をわかちあう、こういうことでありまして、王政復古の大号令というのは、庶政一新の大改革を断行された画期的な御沙汰であります。この御沙汰に接した国民、当時のわれわれ同胞は三千万でありましたが、恰かも暗夜に太陽を仰ぐような歓喜と希望を持って、王政復古の号令を迎えたわけです。しかしてここにいる公議思想—今日でいえば世論—というのは、第一に多数者の持つておる思想ということである。第二に正しい思想ということである。こ

の二つに基づいたものでした。そしてこの公議思想ということについても諸君は、はつきり認識すべきものと思うのです。

次いで「五箇条の御誓文」に移りますが、これは慶応四（明治元年）年三月十四日に国是——国の方針——を決定したものです。

王政復古の大号令は、明治天皇が始めて施政の大方針を示されたものです。

「五箇条の御誓文」は、この施政の大方針に則りまして施政の綱領を明らかにしたものです。この日、明治天皇は紫宸殿にお出ましになりました、御自ら天神地祇をお祭りになりましたして国是五章をお誓いになっているのです。これは諸君もご承知でありましょうが、

- 一 広ク会議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ
- 一 上下心ヲ一ニシテ、盛ニ經綸ヲ行フベシ
- 一 官武一途庶民ニ至ルマデ各志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦ザラシメンコトヲ要ス
- 一 旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ
- 一 知識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ

勇壯進取の氣が充滿しております。そして、またこうおっしゃっておる。

「我國未曾有ノ変革ヲ為ントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ジ、天地神明ニ誓ヒ大ニ斯国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立ントス。衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ」とおっしゃった。仍て群臣はこのご誓文に対し「臣等謹テ聖旨ヲ奉戴シ死ヲ誓ヒ黽勉従事、冀クハ以テ宸襟ヲ安ジ奉ラン」、と奉答し、死を以て陛下のご方針に誓いますと言っておる。非常な決意ですね、烈々たる決意です。

この日別に明治天皇は御宸翰を賜わり、君臣相扶けて四方を經營し、以て国威を宣揚すべし、とおっしゃっています、その中に、

「今般朝政一新の時に膺り、天下億兆、一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事、朕自身骨を勞し心志を苦め、艱難の先に立、古列祖の尽させ給ひし跡を履み、治蹟を勤めてこそ天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし」と仰せられている。一人でもそのところを得なければ、みんな自分の責任だと陛下御自身がおっしゃっておられることは、ありがたい極みであると思います。また、陛下はこの御言葉どおり実行されている

ます。

こういうことから、この章を終るに當って諸君に注意を喚起したいのは、この「国是」ということに対し、単に形式だけを見ては間違ふということです。それはその根底である国体即ち一君万民の政治原則から出発していることを思うべし、ということです。臣と君とは、つまり親子の關係と申しますか、その間になにもものもない。でありますから、天皇親政と公議政治は実質的には一つである。公議を採って親政、御自おんみづかから政治を行なうということになるわけです。あまり長くなりますからこの辺で第一の明治維新期を省はぶきまして、第二の「日本の近代化―憲法制定」について申し述べます。

二、日本の近代化―憲法制定―について

後に述べるように、立憲政治の形式は西洋に採ったのですが、その精神は全く日本固有のものであるわけです。諸君もご承知でしょうが、神話ということで伝えられておりますが、天の安河原やすのかわらという所で八百万やおよその神々が集まっておりますいろいろな協議をしたことの如き、それから、聖徳太子が革新政治を行なわんとして憲法十七条を制定しましたが、その末条に「大事は独り断だんずべからず、必ず衆と共に宜しく論あづからふべし」、とありますが、これがなんと千三百余年いんしえの古に、こうおっしゃっているのです。それから、孝徳天皇が大化改新の二年三月、東国の国司にこういうことを仰せられておる。

「それ天地の間に君として万民を治むることは独り治むべからず、必ず臣のたすけを用ふ」。このことは今日でいえば、輔弼ほひつ政治のことです。これは実に日本政治の骨格なのです。近ごろはこういうわが政治の本質が全く無視されておるのですが、まことに残念のこ

とです。自分の政治を行なうのは、国民の輔弼を以て行なうのである、と孝徳天皇がこうおっしゃっておられるのです。

先ほども述べましたが、明治天皇は王政復古の太皇太后の勅令の中で、神武創業の始めに則り、広く公議を竭し天下と休戚を同じくして庶政を更新すべしということをおっしゃっています。また五箇条の御誓文の第一条に「広く會議を興し万機公論に決すべし」、とあります。これらは、二、三の例であります。會議制度の前驅をなしました公議思想というのは、わが歴代の天皇が採られた伝統的政治思想に立ったものであります。欧米まがいの政治思想をもって来たものではないのであります。この公議思想というのは、幕末になりましてだんだん熾烈になりましたが、この公議思想に組織と理論を与えまして實際政治としたものが西洋の立憲思想、即ち議會政治思想であります。現代の議會制はこれを採ったのですが、精神はいま申しましたように大古以来一貫して伝えられて来た一君万民の思想で、これは日本古来のものであるということを諸君がしっかり身につけていただきたい。

明治天皇は、立憲政治實現の第一歩としまして明治九年、即ち西暦一八七六年、いまか

ら九十二年前の九月七日に、当時の元老院議長の有栖川宮ありすがわのみやに対して、「国憲」の編纂を命じられた。「国憲」というのは今日でいう憲法でありまして、編纂というのは起草ということであります。即ち憲法起草を命ぜられた。この日、明治天皇は有栖川宮に対して「朕わがニ我建國ノ体ニ基キニ広ク海外各国ノ成法ヲ斟酌しんしゃくシ以テ国憲ヲ定メントス、汝等なんどソレ宜シク之が草按そうあんヲ起創シ以テ聞セヨ、朕將まさニ撰バントス」、こうおっしゃっています。これはあとで申しますが、明治天皇はこれのお言葉どおり、ご自分で憲法審議會議に臨み当時の言責を果し憲法を制定されておられます。

いろいろ曲折がありました、明治十五年三月三日に伊藤博文を欧州に差遣さけんされました、憲法及び憲法実施に必要な制度を調査研究せしめられました。伊藤博文は三月十四日横浜を解纜かいらん、五月十六日ベルリンに着いております。そして、主としてドイツ及びオーストリアに留まりまして、ドイツのグナリスト、オーストリアのスタインにつきまして、憲法ならびに行政法を研究しております。伊藤博文一行は、明治十六年の八月四日帰朝いたしました、翌十七年の三月、宮内省に制度取調局を設けて伊藤を長官にいたしました、憲

法制度の取調べに当たられた。明治十九年に起草し、明治二十年に大体出来上り、明治二十一年四月に草案を陛下に奉呈いたしました。それで陛下はそれを嘉納され、あらたに枢密院を設けまして、ここに草案を諮詢され各逐条審議されたわけです。明治天皇は、席上文字通りご自分で欽定されたわけですが、枢密院は明治二十一年五月四日に開院式が挙げられました、会議は五月八日から始まっています。かくてこの会議で皇室典範、帝国憲法、議院法、衆議院選挙法、貴族院令というものを漸次慎重に討議をいたしまして十二月十七日第三詔会を終つて居ります。しかしながら明治天皇はなおご満足されない、更に第二審議会議をお作りになったが、これでもご満足されず第三審議会議というものをまた作つて審議されておられる。ようやく二月五日に完了いたしましたして、明治二十二年二月十一日に憲法を發布されたわけです。これは前にも触れましたが、明治九年の九月七日、有栖川宮に仰せられました「朕將に撰ばんとす」という当年の約束を果たしておられるのです。これは明治天皇の仰せになられたように、建国の体に基づいて定められたもので、御身躬ら撰ばれた文字通りの欽定憲法であつたのです。

ご諮詢の原案は七十六箇条あります。これに蒔蕨（まきくわく）版刷で「憲法註解」と「憲法参照」という美濃判洋紙（みのうはん）の二つ折仮綴をつけまして、枢密顧問官達に配布しています。私も神田の古本屋でこの蒔蕨版刷を見つけて持っておったのですが、戦災で焼けましたが、立派なものです。これを顧問官達の審議の参考にせよと言って渡された。「憲法註解」というのは、当該条文について、内外の註釈を示したもので、「憲法参照」というのは、日本書紀、万葉集の如き日本古来の参照文献をはじめ、外国文献をも当該条文の参照としたもので、この「憲法註解」と「憲法参照」を参考のためにみなに配布されております。

会議は明治二十一年五月から翌二十二年一月まで八カ月の間に四十九回開かれております。明治天皇は、この間ただ一回、一月二十九日の第三審議会の第一日に臨御（りんぎょ）になられなかっただけで、その他は連日ご親臨（しんりん）になっています。殊に明治二十一年十一月十二日の審議の当日、審議途中で皇子昭宮（あきのみや）の薨去（こうきょ）されたということが侍従から伊藤博文に耳打ちされた。伊藤は早速陛下のところへ近づいて耳打ちされたが、陛下は席を立たれない。そして審議の一条が済んだのちに静かにお退（きざ）がりになった。いったい何事があったのだろうかと

顧問官たちは訝^{いぶ}かった。あとから伊藤博文から報告を受けて解ったことだが、いまのことは皇子が薨去になった知らせであるということであつた。つまり明治天皇は、皇子の薨去の報を聞いても大事な憲法審議を中座されなかつたのであります。こういうことは、今日聞いても有り難い極^{きま}みで実に涙の出るほどである。明治天皇の偉大さと同時に憲法に対する非常なご期待と御決意というものがうかがわれる。こういう経過を辿りまして明治二十二年一月三十一日の第三審議會を以て憲法草案がここに完結いたしました。二月十一日即ち皇紀二五五〇年の紀元の佳節に当りますが、この記念すべき日に大日本帝国憲法が發布されました。そして翌二十三年十一月二十五日、待望の第一帝國議會が招集されたわけです。

これによつてもわかるように、「日本近代化」を表徴する日本の「憲法」制定につきましては、その精神である公議政治思想は日本古来の歴史、伝統に求め得べく、決して外国模倣に非らざることを留意すべし、よつて日本の伝統精神を明徴にすること、即ち国体明徴が維新の原動力であること勿論であるが、帝国憲法解釈の第一の根拠も、またここにある

ということをも諸君はよく知らなければならぬと思います。

かつてイギリスにエドモント・バークという政治家がありました。エドモント・バークはフランス革命を排斥しまして、これはイギリスの「基本的政治原則」を破壊するものであると論じたことがある。この「基本的政治原則」ということは、日本に当嵌めれば、政治原則としての「国体」という語になろうかと思ひます。「基礎的」又は「根本的」という政治原則は、その国の歴史、伝統のうちに発生したものでありまして、いたずらに外国模倣では有終の美を収めることは出来ないと思ひます。明治天皇は明治七年三月、宮内少輔であつた吉井友実をヨーロッパの政情視察に御内帑金をお出しになつて派遣されておりますが、吉井は帰朝した時に、ドットの「英国議院政治」という本を持って参りまして、明治天皇にこれを捧呈したのです。そして吉井は、明治天皇に帰朝報告の上奏の中で、イギリスの憲法はイギリスの歴史の中に展開されているから、イギリスの歴史を知らなければ、イギリスの憲法なり、イギリスの議院政治の精神はわからないという著者の見解を披露言上した。これはいい言葉ですね。ドットの名言です。もう一度読んでみると

イギリスの憲法はイギリスの歴史の中に展開されているから、イギリスの歴史を知らなければイギリスの憲法なり、イギリスの議院政治の精神はわからない。吉井は明治天皇に對し奉り^{まう}歸朝報告にこれを申し上げた。明治天皇はドットのこの言に非常に打たれて、ご熱心に聞かれまして、その翌々年、先ほど申しました明治九年、元老院議長の有栖川宮に國憲編纂^{へんさん}を命じ給うた際に、このドットの本を参照せよとおっしゃって有栖川宮に下付されておるのです。明治天皇の御見識と御意の那^{なん}辺にあらせられたかを知るべきものと思う。

この事實はあまり広く知られておりませんが、私どもは憲法においてこの点を見逃してはならない。その国の憲法はその国の歴史、伝統のうちに生き、かつ展開されておることですから、その国の歴史、伝統を知らなければ、その国の憲法なり議會政治はわからない。これは深く味おうべき教訓である。即ち明治憲法の意義と日本近代化の因って来る精神に就て反省すべき点であると思います。

三、日本の発展時代

第三は、国勢の進展ということで、日清戦争、日英同盟、日露戦争の骨格と、その世界的意義について申します。

明治維新政府が、当初の鎖国攘夷政策からだんだん開国親交政策に転向したことは周知の通りですが、攘夷というのはさきにも申しましたように単に排外的鎖国ではなく、対外的平等観から発足したものです。当時の情勢からいって、欧米列国の支配者的横暴というものがアジアの各地で行なわれたのですが、日本もその例外ではありませんでした。これに対して当時の幕府が結んだ条約というのは屈辱的不平等条約であった。これに反抗したわけです。このような形勢でありましたが、だんだん時勢は変化しまして、明治政府の政策もこれに應ずる必要に迫られたわけで、対外消極政策から対外積極政策に転じ、開国進取の方針に移ったわけです。

これから日清戦争のことに移りますが、当時の対外問題のきっかけとなったのは、朝鮮問題であつたのです。日本と朝鮮の關係は古くは日本書紀などに出ていますけれども、昔から深い交渉があつたわけでありまして、朝鮮と日本とは唇齒輔車しんしほしゃというような關係にあつた。かつ朝鮮の地は日本の関門である。国防問題にいたしましても、東亜經營問題にいたしましても、朝鮮は第一の問題であつたわけです。幕末におきましても吉田松陰であるとか、平野次郎であるとか、橋本左内であるとか、西郷隆盛であるとかという志士先覺は、みな対外問題、殊に朝鮮問題というものを重視したわけです。吉田松陰は安政元年、野山獄で「幽囚録」を草しましたが、その中でこういうことを認めています。「善く国を保つものは、先づ進取せねばならぬ。列国の来侵にまかせ、群衆聚の中に坐して為すこととなくば、国家は滅亡する」、俺は知らないとはかり外国の来り侵すのを坐して見ておれば国家は滅びるぞ、と戒められたもので、吉田松陰先生の憂国の至情がよく現われているのです。朝鮮問題がそうであり、ロシア問題がそうである。ロシアの侵略政策につきましましては、日露戦争の時に詳しく言いますが、当時朝野ともに外国の来寇らいこに対し戦々恐々とし

た時代に、先覚志士が蹶^たって「そんなことでは駄目^{だめ}じゃないか」と云って警世の巨鐘を強打した。そして国民を奮起せしめた維新志士の示した先見の明と燃えるような愛国の血潮の迸^{ほとばし}りに対し、今日においても私どもは深く学ばねばならないと思います。

前に申しましたように、朝鮮はその占むる地理的の位置と、それから歴史的の關係というものは、古来から日本と非常な密接な交渉を持っておった。そしてわが国は一貫して朝鮮の独立を助け、その頽勢を振興せしむることが一貫した日本の政策であつた。しかるに朝鮮はいろいろな内紛で困っておる。これがためだんだんとその地位が劣る。その劣えた力をなんとかして回復せしめよう、そして朝鮮の独立を計り助ける、そういうのが日本の政策だつたのです。しかるに日本と清国^{しんこく}との韓国に対する政策は一致しないのです。これにプラスして欧米の東亜侵略政策はだんだん迫つて来たが、この非常形勢を前にして、清国は欧米のアジア侵略政策の水先案内のような役をつとめつつあつた。そしてこれを反映して韓国の危機はだんだん迫つて来た。一方、清国は、韓国の宗主権・支配権は清国に在り、韓国は清国の属国なりと主張し、韓国を隷属視すること多年、清国一流の政策で韓国

に臨んでおったのです。そうしているうちに韓国の政情はいよいよ非常危機に陥ったわけです。それを理由として清国は、武力干渉を行使し以て多年の野望を遂げんとするに至ったわけです。

これは明かに清国の野心・謀略の致すところでありました。現に清国は明治十八年、（一八八五年）日清条約（天津条約）を日本との間に締結いたしました。その第三条に「将来朝鮮に事変があつて日清両国いずれか一方が朝鮮に軍隊を派遣する場合、互に行文知照する」とあり、もし日本か清国いずれかの国が、万一朝鮮に軍隊を派遣するような場合があつたらば、行文をもつて互いに打ち合わせをする、とこう規定してあるにも拘らず、朝鮮にたまたま全羅道、忠清道に東学党事件という擾乱が起きた。これは明治二十七年の四、五月ごろでしたが、この擾乱の鎮圧という口実のもとに、清国は一方的に軍隊を朝鮮に派遣するということを日本政府に通知して来た。しかもその公文の中に、「属邦を保護する旧例」という文字を使って居り、韓国は清国の属国である、それを保護するのは今までもそうであつたがその属国に対し軍隊を派遣するのは当然のことで、それは昔から

行なわれた旧例だ。即ち「属邦を保護する旧例」という文字を使っておる。わが政府では勿論未だかつて朝鮮が清国の属邦だなんて認めたことがないと嚴重抗議しておるのです。かくて朝鮮に対する日本と清国の政策の相違、先ほど申しましたように、わが国では朝鮮の独立とその改革を期している。これに反して清国は朝鮮を属邦としてその支配下に置こうとしている。つまりこのような日清両国の朝鮮に対する根本政策の不一致が日清戦争の発端となったのです。かくて日清戦争は、日本の「援韓討清」即ち韓国を助け清国を討つことであつた。よつて「援韓討清」は、日清戦争当時の日本のスローガンです。韓国を援け清国を討つという大義名分で日清戦争は開始された。これは朝野を問わず、また上下を論ぜず、全国民的感情が爆発したもので、年齢も男女もない、文字通りの挙国一致振りを示したもので、正に一丸の火の玉となって清国に當つたものである。これより先、清国は対日戦備に汲々たり、兵隊を訓練する、造船を急ぐ、殊に日本が驚いたのは、鎮遠、定遠というが如き新鋭巨艦を造つたことで、之が指揮官として丁汝昌を提督にし、その誇る大艦隊を率いて日本をおどかしに來たことです。そういうデモンストレーションまでやつた

一幕もあつたのです。先ほど申しましたように当時、東学党の乱というのが蜂起しましたが、朝鮮政府は之を討伐する実力なく当時朝鮮に来ていた清国の公使袁世凱えんせいがいと結托し、五月二日朝鮮国王をして臣と称して清国に助けを乞わしめ、これに応じてこれ清国が出兵をしたという口実を作ったわけなのです。東学党の乱というのは、朝鮮にとっては大変な乱なのですが、その時の朝鮮の独立党の志士で金玉均きんぎょくきんという人が事敗れて難を避けて日本に逃がれて来たのです。ところが金玉均は証しやうかされて上海に連れて行かれて上海で殺された一幕もあつた。それから朴泳孝ぼくえいこうという朝鮮の志士も閔族並びに清兵に対し戦わんとして拳兵に失敗し、身の置きどころがなく日本にやって来た。こういう歴史もあります。こういう情勢で日本と清国というのは政策上全く相反していたわけです。当時外務大臣の陸奥宗光むつみづねみつは、「隣邦の変乱は帝国自衛の道に於て傍観する能はず」と言っている。こういうような経過を経て八月一日ついに清国に対し宣戦することになったのです。

宣戦のご詔勅しうしよくに曰く「朝鮮は大日本帝国が其の始に啓誘して列国の伍伴に就かしめたる独立の一国たり、而して清国は毎に自朝鮮を以て属邦と称し陰に陽に其内政に干渉し其の

内乱あるに於て口を属邦しよなんの拯難しんなんに藉しき兵を出したり」と。正に御詔勅のとおりであります。かういうことで、陛下は開戦になるや非常にご心配になりました、九月十三日広島に戦時大本營を移されたわけです。これは実に恐れ多い話ですが、明治二十七年の九月十三日に居をお移しになられてから、翌二十八年の四月二十七日まで、広島にご滞在になられました、陛下の御起居はただの一室ですまされ、お庭の散歩にも御出いでましにならないで一室に蟄居ちつきよされたままです。当時どんなに陛下がご心配になられ、戦局の前途に対して心痛あらせられたかということがこれで察せられます。そういうわけですから開戦になると、義勇兵の志願が続出したわけです。本当に朝野一致しまして、朝鮮は隣邦なり、艱難を克服し義俠を避くべからず、それをこのままにしておいては断じて不可なり、やることをやるうというのが当時の日本民族の叫びであったのです。

そういうわけでヨーロッパでは、とてもこれは小さな日本が大きな清国に勝つわけがないじゃないか、これはまるで無茶だということで、日本の所謂いわゆる暴虎馮河振ひょうがぶりの開戦に対しヨーロッパ人は驚いた。やってみると開戦後一か月半にして、日本軍は朝鮮半島から清国

軍を追い払った。九月十六日、朝鮮の平壤から清国の兵隊が退却した。有名な黄海こうかいの戦いは九月十七日で、先ほど申しました丁汝昌の率いる東洋一を誇っておった「北洋艦隊」は、この黄海の戦いで非常な打撃を受けた。旅順半島は十一月二十一日に日本軍に占領された。最後の運命を決したのは、二十八年二月十二日の威海衛いかいゑいの戦いであるが、この戦で北洋艦隊は全滅し、丁汝昌提督は毒を仰いで自殺しています。この威海衛の陥落で大勢が決まったわけです。日本は、当時御一新ごいっしん以後幾許いくばくもありませんから、軍備などは不十分であつたが、全く日本人の有つも感慨で戦つて勝つたわけです。こういうことで、当時の總理衙門、北洋大臣兼直隸總督ちよくれいという清国随一の政治家李鴻章りこうしょうが三月十九日下関に来て、日本に和を求めた。四月十七日に日本と清国の間に和議が結ばれた。馬関条約ばかんといつて、いまもその遺跡が下関の春帆楼しゅんぱんろうという旅館にその名残りを留めています。

この馬関条約で朝鮮の独立、奉天省の南部の地（遼東半島）、それから台湾、澎湖全島を日本に割譲かつじやうする、軍事賠償として銀二億両を日本に支払う、その他の条項が取り結ばれて、馬関条約というものは成立したわけです。そして四月二十一日に平和回復の大詔が渙

発されたわけなのです。ところが晴天に霹靂へきれきです。藪やぶから棒です。ロシアは馬関条約の内容を知るや、ドイツとフランスを誘いまして、四月二十三日東京駐在のフランス、ドイツ両公使とともにわが外務省を訪問し、「講和条約の中にある日本の、奉天半島つまり遼東半島の占領は極東永遠の平和に障害を与うるものなるに因り、日本政府が其の永久的占領権を抛棄せんことを忠告す」、と提議し、以て清国政府も此の干渉を口実とし批准交換の延期を、我国に請求して来た。わが政府は非常に驚ろいたわけです。それで我国はこれに就て列国會議を開かんとしたのですが、時既におそしです。ロシアの艦隊は日本の諸港へ押し寄せ来り、日本を威嚇したのです。残念無念ながら、日本は戦争をやめた直後ですからロシアの脅威に対抗することが出来ませんので涙を吞んで三国の勧告を容いれた。これが三国干渉事件というのです。その時に発せられた遼東還附のご詔勅しよくていというのは、悲憤の極で、涙なくしては拝読し得ないお言葉でありました。

しかるに一方ロシアは、清国とカシニイ条約を結んで旅順港、大連灣を經營することとなり、東三省鉄道も掌握し、それからウイッテ条約というものを結ぶ。ドイツは膠州灣こうしゅうわんを

占領する、更に英米の策動などがあって、清国の運命というのは実にひどくなったわけ
です。

先ほど申しました当時の陸奥外務大臣の「蹇々録」の中にこういうことがある、「平壤
及黄海の戦捷しやうけつの世界に伝播するや、欧米各国の視聴、思想しゆ頓とんに一変し、今や戦捷者に対し
嫉妬しつとの念を起すに至れり。」つまり日本が清国に勝ったものですから、欧米では日本に対す
る嫉妬心を起こすに至った。これは当時日本がだんだんと勃興しようという新鋭の傾向に
あったから、欧米のアジア支配政策が日本の勃興によって邪魔されるということで、日本
に対する圧迫に乗出してくる前兆であったのです。ロシアはドイツとフランスと提携いた
しまして三国干渉を敢てしながら、即ち遼東半島を日本が持っているのは極東永遠の平和に
害があると言いながら、自分は自らの公言を蹂躪して勝手に遼東半島を占領した。そして
日本に忠告した極東永遠の平和というものを自分自ら蹂躪した。これは日本人としては到
底忘るべからざること、チェコ事件などの比ではありません。日本としては怨恨骨髓に
徹した。これはまさに史上稀に見る暴挙であった。ここで注目すべき事実がある。それは

ロシアのウイッテという大蔵大臣をした人物で後年日露戦争の終結の時にロシアの代表としてアメリカのボーツマスに行った人ですが、そのウイッテの回想録というのがあるので。この回想録を見ると驚くべし、ウイッテは先ほど申しました李鴻章に対し五十万金ルーブルを賄賂として贈り常蔭桓に対しては金二十五万金ルーブルを賄賂として与えて買収したことを暴露して居ります。これを以て見ますと、当時の清国の政治家の腐敗堕落振りと売国心が如何にひどいかということがわかる。こういうようで清国の弱体無力化と腐敗政治ということが反映いたし、これに乗じてロシアの満洲侵略がだんだん露骨化し来り竟に日露戦争となるわけでありますが、ロシアによって計画された三国干渉は非常にわが朝野を刺戟いたしまして、有名な「臥薪嘗胆」という言葉が流行した。臥薪というのは薪に臥す、嘗胆というのは胆を嘗める。どんな辛いことがあってもこの怨みを晴らそう。この悪夢は決してわれわれの記憶から消え去らない。よし、日本人ならどんなに苦勞しても素志に徹しよう。これが所謂当時の臥薪嘗胆の意味ですね。そしてこの国民的感情が燎原の火のように全国に広まったわけです。こういうことを見ますと、日清戦争それから

日露戦争を目して日本の侵略戦争であると断ずる如きは、ためにする者か、さもなければ全く歴史を知らないものの言うことである。諸君はよく事實は事實としてしっかり把握すべきである。諸君はよく歴史を研究して、日清戦争・日露戦争の世界史的意義を学び如何にしてアジアの覚醒と独立と復興が出来たかを虚心坦懐に想うべきである。日清戦争はこのくらいにしておきまして、これから日露戦争に移ります。

思うにロシアの東方政策というのは、シベリア鉄道を以て満洲を貫きウラジオストックまで延長する計画を発表した明治二十四年、一八九一年以来目立ち、次第に露骨化し来たものであった。この計画というのは明治二十九年六月、李鴻章がロシアに行った時に、承諾せしめられたもので、カシニイ条約というものが成立して、これによってロシアの野望が達せられたわけです。そして同年の十一月に東清鉄道会社が設立された。翌三十一年三月には、ロシアは艦隊を以て旅順口を占領しまして、ついに清国に迫って旅順口及び大連湾を租借する条約を締結せしむるに至った。こういうふうにして清国は、ロシアをはじめとしてドイツ、イギリス、フランス各国によって、各要地の租借を強要せしめられ

た。これではさすがの清国の人民もたまらないということで、外国に対する排外運動というものがだんだんに激化^{びまん}瀾漫いたしまして、明治三十三年に義和団^{ぎわだん}と称する民間団体の蜂起を見るに至りました。五月に至り北京は義和団の重囲に陥った。そのために列国の外交団も危機に陥りましたので、外交団を救うために、日本を主力とする遠征軍を派遣いたしました。暴徒を一掃したわけです。こういうふうにして列国は、領土の保全と商工業上の機会均等というものをお互いに約して明治三十四年九月に撤兵したのです。これがいわゆる北清事件^{ほくしん}あるいは義和団事件と称せられるものであります。

ところがロシアは、この北清事件を好機としまして、これでは鉄道保護は出来ないというので鉄道保護を名目として、満洲に出兵しついに軍事的に満洲を占領したのです。そしてその後ロシアは占領地より撤兵すべき旨を宣言したのですが、一向これを実行しないのです。依然としてロシアは満洲に駐兵している。わが国といたしましても、ロシアに対して撤兵方^{がた}を強硬に抗議したのですが、ロシアは応じない。こういうふうにして極東の情勢は、ロシアの満洲侵略によりましてだんだん危機に陥った。そしてこれを救うものは日本

以外にはない。しかしこれは日本一国ではとうてい能くし得る所でなかった。一方、イギリスもまた清国の領土保全を政策としていますから、ロシアに対し撤兵させようとしたけれども、イギリスもまた独力ではロシアに当り得ない。こういうことで、日本とイギリスがこの点において共通の立場にありますから、日英同盟というものが出来たわけです。明治三十五年二月、桂内閣の時なのです。日英同盟の要点は次のようなものです。

一、日英両国が清国に於て有する利益及び日本が韓国に於て有する政治上及び商工業の利益が、他国の侵略的行動によって侵迫せられた場合には、両国はこれを擁護する為に必要なる措置を執り得べき事。

二、若し日英兩國の一方が各自の利益を防護する為に列国と開戦したる場合には、他の一方は厳正中立を守るべし。若し他の国が該同盟に対し交戦に加わりたる時は、両国は協同して戦闘に当るべき事。

こういうふうにして、日英同盟が出来たものですから、さすがのロシアはこれに鑑かんみるところあり、明治三十五年四月、清国と満洲撤兵条約を結びまして、撤兵を三期に分ち、

夫々それぞれの地方から撤兵することを約したのですが、第一期の撤兵はしたが第二期以後のことはちつとも履行しない。のみならず更に新しく清国に要求を提出しまして、滿洲の利益独占を計るに至った。ここにおいて日本はもちろんですが、イギリスもアメリカもロシアのふるまいがあまりひどいものですから警告を発しまして、清国をしてロシアの要求を拒こはましめた。よってさすがのロシアも、遂に滿洲を開放すべきことを宣言するに至ったわけです。しかし實際のところロシアは、既往の約束宣言を一切無視したばかりでなく、新しく極東總督府を設け、アレキシエフを長官として韓国及び滿洲に対して、露骨な侵略政策を打ち出した。よってわが国の国論は次第に沸騰いたしまして、ロシアに対し強硬に当るべし、という論が大勢を支配するに至ったわけです。かくて日露兩國間にいろいろの経過交渉を経ましたが、ロシアは依然としてその態度を改めないのです。即ち滿洲還附条約を履行しない。滿洲から撤兵しない。かつ韓国における日本の行動をいちいち制肘せいぢゆうするといふようなことが度重たびかさなりまして、わが国としましては、この上の我慢は到底出来ない、という事になったわけです。一方ロシアは、日本に対する戦備を着々進め、ついに二月三日

ロシアの旅順艦隊が出動したので、事ここに至っては、日本としてはこれ以上の折衝はそれの余地なく、已むを得ず従来のロシアとの交渉を打ち切りざるを得ざるに至ったわけです。かくて隠忍に隠忍を重ね我慢に我慢を重ねたのですが、ことここに至っては已むなく、二月十日ついにロシアに対し宣戦の詔勅が渙発された。これよりさき、先ほど申しましたようなロシアの度重なる日本無視の行動に対しまして、国論が沸き、明治三十六年八月九日近衛篤磨公を会長とした対露同志会が民間有志によって結成せられまして、対露開戦の強硬論を打ち出し、また、帝国大学においては七博士が蹶起し、対露強硬論を桂首相につめよるといふひと幕もあつた。こういう時ですから、宣戦の詔書が出るや国民は歓呼してこれに応じ、一致団結して蹶起したのである。しかしながら考えてみると、日本とロシアの国力の差は随分ひどいのですから、戦争の結果は樂觀出来なかつた。伝えられるところによりますれば、当時の参謀次長児玉源太郎は「今度の戦争は四分六分で戦う」と語り、当時の海軍大臣山本権兵衛は「日本の軍艦を半分沈め、人も半分殺す。残りの半分でロシア艦隊を全滅させる」と語つたとのことです。これをもつて見ましても、わが国の決

意が並々でなかったことがわかるのです。勝敗を天秤^{てんひん}にかけた戦争でなく、止むに止まれず、勝敗を度外視しての自衛上並びに道義上どうしても起たなければならんから起ったのだということがわかるわけです。

こういうことで開戦になりましたが、戦果を見ますと、明治三十八年一月一日諸君ご承知の旅順口の開城となったわけです。それから三月十日には奉天の会戦となり日本が勝利を収めた。そして五月二十七日、これも諸君の知っている日本海海戦となり、わが国が大勝利を収めてここに大勢が決まったわけです。六月九日に至り当時のアメリカ大統領セオドル・ルーズベルトが両国に勸告をいたしまして、講和談判がポーツマスで行なわれまして、九月五日に議定書に調印されて日露戦争は終結したわけです。そして日露戦争の意義は、宣戦の詔勅にも明らかにされております。即ち宣戦の詔勅にあります如く「若^も、満洲にして露国の領有に帰せむ^か乎、韓国の保全是支持するに由^よなし、極東の平和亦素^{もと}より望むべからず」、とありますこと御承知のとおりと思えます。これによって明らかであります如く、日露戦争は、第一、日韓両国の自衛上已^やむなくして行なわれたものである。第

二、極東の平和、アジアの安全を期するため日本の果たすべき役割というものを思う時、ロシアの満洲支配は絶対に黙視し得ないということです。こういう二大目的から日本全国民が一致して、必ずしも勝算のない戦いに、敢て当ったわけなのです。この目的というのは、既に明治維新の志士たちによって方向づけられました明治維新精神である対内、対外同時革新の指導原理を辿ったものに外ならず、ということが出来ると思います。日清及び日露戦争を目して、日本の軍国主義の現われであるとかいう徒輩は、前述した如く日清戦争、日露戦争の意義を知らないものである。よって私はここで諸君に対して篤と両戦争の意義を研究していただきたいということを重ねて要望したい。

終りに日露戦争の世界史的意義ということについて寸言を申し上げます。

日清戦争はヨーロッパの東アジア侵略に対する日本の第一次反撃であり、日露戦争はその第二次反撃であったと思います。

日本のロシアに対する勝利は、四百年來のヨーロッパの東亞侵略ならびに世界史を一変せしめ、白人圧迫下に苦しみ続けて來た被圧民族に希望と勇氣を与えたことは事實であ

ります。前の印度首相であり、今の印度首相の父でありインド独立運動の功勞者でありましたジャワハルラール・ネルは、日露戦争当時は十四才の少年であつたのですが、日本軍の連戦連勝で深刻な感激を受けまして、こう語っているのです。「余はヨーロッパの羈絆^{はん}を脱せるインドの自由並にアジアの自由を想望した。余は劍^{ひづ}を掲げてインドのために戦い、インド解放に貢献すべき武勲を立てたいと夢想した」、後年インドを救つた志士で當時十四才の少年ネルは、日露戦争で非常な感激を受けてこう言っているのです。即ちインドの解放、アジアの解放戦士たらんと決意して當時十四才の少年が言つたのです。

日露戦争後十年ならずしてヨーロッパ大戦が起つた。これはまさにヨーロッパの内乱ともいふべき第一次世界大戦で、ヨーロッパ覇權没落の前兆であつたわけです。かくしてヨーロッパは世界制覇に対する昔の自信を失なつた。ヨーロッパの前途は暗雲に被^{おほ}われるに至つたわけです。即ち、西はモロッコからエジプト、東はインド、安南、南洋一帯にわたる有色人種が抬頭して來た。かくてヨーロッパ戦争に及んで白人の世界制覇は没落ということになるのです。この間においてアメリカの人種學者ストッダードの著「有色人の昇

潮」(ライディング・タイド・オブ・カラス)をはじめシェペングラの「西洋の没落」というような著書が続出しこれを裏書して居ります。

かくて日露戦争の結果により有色人種は、目を覚まして白色人種の羈絆から脱し、以て独立の機運に向かったのであります。一部の学者、評論家などの言うような日清戦争、日露戦争観とは違うでしょう。しかしこれによって日本がいばっては駄目です。あくまで諸君は事実それ自体を探求し研究し勉強しなければいかん、私はこれだけを諸君に言つてゐるのです。

そういうことで十年ならずして第一次世界大戦が始まった。同時に、日本は第一次世界大戦において英米側に立つて非常な功績をあげ、日本の優秀な能力と努力を示したが、これが却つて仇となつてアングロサクソン側から非常にねたまれる結果となり、対日包囲陣に陥ることになった。かくて日本は非常な苦境に立つことになりついに止むを得ずして、平和的、経済的、文化的発展を大陸に求むるに至ったが、ここにおいても日本の進路が妨害されるに至り、満洲事変が始まるわけです。これから第一次世界大戦に就いて語ります。

四、第一次世界大戦

第一次世界大戦はその結果から申しますと、ドイツ帝国、それからオーストリア・ハンガリー王国、第三、ロシア帝国、第四、トルコ帝国、この四大帝国が一時に消滅していきます。そして戦後の始末を見ますと、戦勝国間に意見の不一致があり、かつ多くの「秘密条約」が出来ておる。それからパリ会議というものがあるのですが、そのパリ会議の指導原理であつた「民族自決主義」の如き、ウイルソン大統領の理想であつたのですが、こういうものがみんな有耶無耶になつた。つまり戦後の現実世界にぶつかつて駄目になつたわけです。結果はそういうことです。

先づ第一次世界大戦の原因から申しましょう。一九一四年、わが国では大正三年ですがこの年の六月二十八日にオーストリア・ハンガリー王国の皇太子夫妻がボスニア州の首都サラエヴォで暗殺された。犯人はセルビア人であつた。当時のオーストリア外務大臣のベ

ルヒトルトはこの機会を擱んで、セルビアの清算をしようと決意したのです。ところがセルビアの背後には汎スラブ主義のロシアがおるわけです。したがってセルビアとの開戦は、ロシアとの開戦を覚悟しなければならぬ。それでオーストリアは同盟国であるドイツの態度を打診したのです。そしてドイツの支持を取りつけたわけです。そういうことでオーストリアは、セルビアに対して最後通牒を出したわけでありましたが、この最後通牒に対してロシア、フランス、イギリスの三国協商側とオーストリア、ドイツ、イタリアの三国同盟側とは微妙な折衝をくり返したのですが、遂にオーストリアはセルビアに対して七月二十八日、宣戦を布告した。これに対して翌二十九日ロシアは大規模の動員令をくだした。かくて八月一日になると、ドイツとロシアが開戦となる。次いでドイツとフランスが八月三日に開戦、八月四日にはイギリスとドイツが開戦というふうに拡大したわけです。日本とドイツの開戦ですが、これはイギリスのドイツに対する参戦から三日後の八月七日の閣議で決定いたしました。正式の対独宣戦布告は八月二十三日です。

なぜ日本が対独参戦に踏み切ったかについては、いろいろな見方、つまり日本に不利な

点、もつともだという点がいくつかあるのですが、不利な点も混^まぜて諸君の前に日本参戦の動機、理由についての四つ五つの点、それも外国から見た日本参戦のことをも申し上げます。

アメリカの國務長官であつたランシングはこういうことを言っているのです。ヨーロッパ戦争の勃発は、日本が支那に政治上の勢力と経済上の支配權とを増進する新しい地盤を獲得する好機會を提供した。即ち山東省における青島^{チンタウ}の降伏を日本が要求したのは、支那に対する日本の野心だ、ということです。

それから、当時のイギリスの海軍大臣で後日總理になつたチャーチルの解釈はこうなのです。日本は十九年以前の一八九五年に行なわれた三国干涉の歴史を忘れていない。即ちドイツに対する復讐であると見ているのです。

これに対して、日本側の意見はといいますと、参戦後に外務大臣となつた石井菊次郎は、欧州戦は軍閥野心と正義自由の戦いで、日本は正義自由のために起つたのだ、そのほかに日英同盟の誼^{むす}みによって参戦したのである。それから三国干涉に対する清算手段のた

めであると言っています。

さらにイギリスの外務大臣であったエドワード・グレーの解釈ですが、彼は日本の参戦は日英同盟に対する日本の情誼だ、それからドイツに対する憤慨、これはドイツの敗戦でオランダに亡命したカイゼルがかつて日本に対して「黄禍論」（黄色人種である日本人が白色人種に対してわざわざいをするようになるという論）を言ったことがあるので、そのカイゼルの「黄禍論」に対しての日本感情と利益問題である、とこう言っています。

日本参戦に対する理由は、八月二十三日の対独宣戦の詔書によって明らかであります。が、その詔勅によりますと、ドイツは租借地たる青島で戦備を進め、ドイツの艦艇が東亜の海洋に出没して日本とイギリスの通商貿易を威圧し、極東における平和が危殆に瀕したと指摘されて居ります。これは宣戦の詔勅による開戦理由なのですが、更に思われることは、先ほど申しました三国干渉の張本人であるロシアに対しては、十年の忍辱後に日本が勝利を得た。ドイツに対しては、黄禍論などを振りまいて日本民族を侮辱しておる、これに対する反省を求めたためである、という見方もあるわけです。

いずれにいたしましても、八月四日ドイツがベルギーの中立を侵したことを理由として、イギリスはドイツに対して宣戦を布告し、日本に対しては八月七日正式に戦争参加に就ての援助を要求して来たのです。

そして一九一七年即ち大正六年になりますと、第一次世界大戦の運命を決する三大事件が発生しております。

一は、ドイツが二月一日無制限の潜水艦戦を再開したこと。

二は、ロシアにおいて三月十五日、革命が勃発したこと。

三は、四月六日アメリカが参戦したこと。

当時、世界の八大国はアメリカ一国を残して全部参戦していた。そしてそのアメリカも、ドイツが非武装船に対する無制限撃沈政策を取ったものですから、之に対し強く反撥し、ついに一九一七年四月六日、ドイツに対して宣戦したのである。

こうしてドイツは四面敵を迎えることになり、いよいよ敗戦の色濃化し、カイゼルは亡命し、ドイツに和平運動が現われるに至った。一九一八年一月八日に至り、ウイルソン大

統領により平和条件十四カ条の声明が出されました。そしてドイツは、一九一八年十月六日、スイスを通じアメリカ大統領に対して休戦を申し込んでいます。かくて、ドイツとロシアに革命が起こっているのですが、おもしろいのは、その経路と差別です。ロシアの革命は、敗戦、そして皇室が退位された。そしてブルジョワ政權と社会党との連立政權という経路を辿り、ついにいまの共産政權の樹立となったのに反し、ドイツの場合は、敗戦、皇位退位。カイゼルはオランダに亡命した。それから純社会党政權とこれとの連立政權を辿り、遂にヒトラーの独裁政權となったわけです。これは民族の傾向と歴史のおもしろさがありますね。

ドイツがなぜヒトラーの独裁になったかという点、これも詳しく申したいのですが時間がありませんので省きます^{はよ}けれども、これは一つはドイツに課したベルサイユ条約が非常に苛酷峻厳なもので、これが実施はドイツ人の生存と自負を蹂躪したこととなり、これが大きな原因でありまして、これによってドイツの革命、そしてドイツ民族主義を掲げたヒトラー政權が出たわけなのです。こういうことで、当時のウイルソン大統領の理想的表徴

であったデモクラシーは、ドイツにおいては現実無視の幻想となり、敗北主義と屈辱と同意語となり、ついにヒトラーの独裁政權を招くに至ったわけです。

パリ平和會議について

次いで、パリ會議（一九一九年一月十八日から六月二十八日）のことをお話しますと、戦争は四年四カ月継続しましてアメリカの参戦——アメリカの参戦は最後の一年七カ月です——で、とにかく英仏側の勝利となり、大正八年（一九一九年）六月二十八日に対独講和条約の調印を以て終了いたしました。

そして、この大戦に主役をつとめましたイギリス、アメリカ、フランス、イタリアの四大国の元首、首相、外相が、屢々パリに集まって平和會議の協議会を開いた。平和會議の中心は五大國會議で、この會議には日本も参加しましたから五大國會議を開いて決めたこととなります。

先ほども触れましたが、日本は友邦として非常な犠牲を払ったのです。日本海軍などは、これはあまり発表されていないのですけれども、日本海軍の活動範囲は、東洋、南洋の全海域を警護し、更に地中海から南米沖にまで出動して、連合国側のために非常な協力をした。しかも日本のこの非常な協力も、戦争が終るや、英米は日本を抑圧にかかったことは周知の事実です。

思うにこの戦争の一つの大きな業績は、ウイルソンの提唱した国際連盟の創設なのである。国際連盟というのは、国際連盟の目的の中で明らかにされている如く、「国際間の協力を促進」すること、「国際間の平和と安全を達成する」ことという、立派な理想だったのですが、現実にはその理想、目的に相反することになりました。即ち、(一)ドイツの復興を不可能にする、(二)日本を抑圧して東亜における日本の地位を奪うことになったのは皮肉な現象で、非常な逆効果をはたすことになったわけですから。

パリ会議では、日本は、(一)膠州湾租借地その他ドイツが山東省に持っておった鉄道その他の権益の譲渡、(二)太平洋の赤道以北におけるドイツ領諸島の譲渡、それからこれは諸君

も聞いたでしょうが、日本はパリ会議で、(三)人種平等案というものを出した。けれども、これらはいずれも通らないのです。こういう点から見ても国際間における所謂現実政治の冷厳さというものの姿がハッキリわかるのです。

次いで開かれたのがワシントン会議で、これは一九二一年の十一月です。ワシントン会議では、アメリカが戦時中における日本が極東で果たした活動を抑止し、それから支那をめぐるの日本との対立意識を強め、かつ、アメリカはイギリスとともに海軍軍備の競争に終止符を打たんとして、大正十年（一九二一年）の十一月から翌年の二月にかけて、軍備制限および太平洋・中国問題に関する国際会議として、ワシントン会議を開くにいたしました。そしてワシントン会議におけるイギリスとアメリカの提携は、歴史はじまって以来これほどのものはないといわれるほどの緊密な提携振りを示し、日本を抑えつけるために、両国は完全な協同作戦を果したのです。そして極東問題の処理、即ち日本排斥を謀ったのです。この極東問題処理という目的のために、ついに日英同盟をも葬ってしまったのです。それから支那における日本の地位を奪う。山東における日本の特殊權益を放棄せ

しめたのです。そして関係各国が保有する主力艦隊の比率を、イギリス、アメリカ、日本をそれぞれ五・五・三という差別的な比率によって日本の保有量を制限したのです。ワシントン会議は、このような非常な打撃を日本に与えたのです。さらに昭和五年（一九二〇年）一月には、補助艦を含む海軍軍備制限に関する国際会議として、ロンドン軍縮会議において、一層深刻な打撃を日本に加えた。

こうして、ワシントン会議、ロンドン軍縮会議などによって日本抑圧の方途がくりかえされ、英米両国の世界支配の野望は着々と実を結び、その反面、日本は次第に窮地に立たされるようになっていきました。こうした背景のもとで、昭和六年（一九三一年）九月、満洲事変が勃発し、やがて満洲建国となります。これらの意義に就て、また南満洲と日本の特殊地位に就てお話ししたいのですが、時間がありませんからやれるところまでやりまします。そして、とても大事な第二次大戦についての話に進みたいと思います。が時間の関係で十分にお話が出来ないかもしれません。

南満洲は、日清・日露の両戦争において日本が払った非常な犠牲に対する思い出のある

歴史的地域であります。日清戦争で日本は下関条約により清国から旅順、大連を含む南満洲の南端の遼東半島を營口の線まで割譲を受けたのですが、それは先ほど申しましたように、不法にもロシアが主唱して行なわれたドイツ、フランスによる三国干渉により日本は支那に還付を余儀なくせしめられた因縁つきの土地なのです。日露戦争は、ロシアの満洲侵略に対し日本が自存自衛のため存亡を賭して戦ったもので、旅順の攻囲線、奉天の大会戦など日本人の記憶に今尚忘れることの出来ないものがあります。この戦争の結果、日本はロシアから遼東半島の租借権、長春以南の鉄道を獲得したわけです。

そして一九一〇年、明治四十三年ですが、日本は朝鮮の併合により、日本の領土は満洲と国境を接するようになりましたので、満洲に移住した八十万の朝鮮人の保護と管轄権に對し、日本は当然これが行使する新責任を負担するに至ったわけです。

一方一九一五年、清国との間に締結された南満洲、東部内蒙古に関する条約、及び付屬公文によりまして日本は遼東半島の租借権と南滿鐵道及び安奉鐵道の經營權を九十九年間延長され、南滿洲には日本人が旅行し、居住し、各種營業に従事する權利、ならびに商、

工、農業のために、土地の商租権を獲得いたしました。

こうしてわが愛国的感情、国防上の必要、条約上の権利、これまで払ったわが同胞の犠牲、活動などを合体いたしましたして、満洲における日本の特殊地位というものが構成されたのであります。そしてこれは、以上のいろいろな理由と、これに基づきわが国民が過去四半世紀に亘^{わた}って満洲において挙げました平和的、経済的、企業的業績の結果であつたわけです。

しかるに満洲におけるこの日本の特殊地位について、満洲の張家二代即ち張作霖と張学良の政権、それから当時の支那中央政権、その背後にある外国勢力が合作しまして、わが特殊地位を無視妨害する政策を取り、だんだんと露骨化して来たのです。そして排日運動は各地に蜂起しました。満洲におきましては万宝山事件、中村大尉事件の如きその例で、満洲事件勃発の前駆をなした不祥事が続発したわけです。万宝山事件というのは、昭和六年（一九三一年）七月一日に、満洲の長春の南、約十八マイルの小部落で、支那農民と朝鮮農民との間に起つた紛争・衝突であつたのです。これがきっかけで、朝鮮全土に激烈な

支那排撃の運動が起こった。仁川^{じんせん}その他の在住支那人に損害を与えたが、その反射作用として支那全土に排日、日貨ボイコットが展開された。

中村大尉殺害事件というのは、六月末に起こったのですが一般に知れたのは八月十七日です。満洲奥地を視察旅行中であつた中村大尉の一行が、洮南の附近で支那兵につかまつて射殺された事件で、日本人をして非常に憤慨せしめた事件です。

前にも申しましたが、満洲における日本の特殊地位は、日英同盟（一九〇二、一九〇五、一九一一年）日露協約（一九〇七、一九一〇、一九一二、一九一六年）、石井・ランシング協定によつて認められたものであるが、今や前記日本の特殊地位は、前にも申した如く、満洲及び支那中央政権とその背後の外国勢力によつて覆えされんとしつつありました。この点について諸君はしっかりした認識を持つてもらいたいのです。

日本の生んだ卓越した東洋史の権威である矢野仁一博士は、「満洲は中国の領土に非ず」と断言しています。事実、満洲は万里の長城の外側にある塞外^{さいがい}の地であり、その土着住民は、北方民族であるウラル・アルタイ系の満洲民族で、その建てた満洲国であること

は、史実の明証するところであります。この満洲民族が、やがて中国全土に亘り大清帝国の名により二百五十年も支配して、優れた東方文化を作ったのですが、やがて辛亥革命で大清帝国が仆れ、清朝というものがここで滅びた次第です。辛亥革命は、孫逸仙（孫文）などによって図られ新たに中国政權が誕生した訳ですが、同時に満洲は、中国領の東三省となりました。

ここで余計な話に移りますが、この辛亥革命というのはその青写真時代から日本有志者の一方ならぬ援助協力を得たもので、日支提携の実を挙げようとして革命のため払った日本民間人の努力と犠牲は、莫大なものがありました。そしてついに革命は成功したのですが、この辛亥革命の主役であった孫逸仙は大正十二年（一九二三年）神戸で演説をしたことがあるのです。彼はこの演説の中で、日支提携のために満洲を日本に譲り与える意向のあることを言っているのです。また、ほかの機会でも、同一趣旨を語っています。これらの経緯は別といたしまして辛亥革命当時を回顧して、まことに感慨無量なものがあります。

そしてこの孫逸仙の側近であつた蔣介石總統は、この間の消息をよく承知して居ります。彼が日本に対して非常に好意的で、第二次世界大戦中に、英・米・ソ・支四国による、終戦後の対日占領政策を討議したあのカイロ會議では、彼は日本の皇室を擁護したと、終戦時に當つては、恨みに酬^{むく}ゆるに徳をもつてするという声明を出したこと、大陸に在った同胞を悉く帰還せしめたこと、賠償を放棄したことなどは、彼の遠大な日華親善政策の具現であつて、因つて来るところ辛亥革命当時にも求め得ようと思う。また彼は、今度の戦争は一部の日本軍閥がやったことであるから、日本の国民とわれわれ国民は仲好くするのだ、と堂々と正論を押し出している。追^{おそ}に蔣總統であると思います。前にも申したのがこれは、辛亥革命についての回想によること深いものがあると信じます。私は、革命当時の志士萱^か野^の長^{ちやう}知^ち氏と懇意でありましたので、這^{しゃり}裡^りの消息を知つて居ります。彼は日本人として革命協力の代表的人物の一人で、孫逸仙が北^ペ京^{キン}で死が枕元に臨んだ時看護したただ一人の日本人でありました。彼は革命援助のため自己の生命と財産を抛棄してやったのです。そういう志士は外にも幾多おりました。これらの逸話も、孫逸仙のそばにいた蔣介石

總統は知っているわけです。今度の日支戦争は日本人の希望するところではないのだ、よってよくこれを理解し日本人と抱き合わなければ日中親善はできない、またアジアのほんとうの親善は出来ないというのが彼の思想です。だからああいう発言をしたのです。

大變脱線しましたが、満洲事變の話は大變長いので満洲事變だけで独立の講座が欲しい程です。事變の直接の原因は、一九三一年（昭和六年）九月十八日の夜満洲の首都奉天の北大營に近い柳条溝で、南満洲鐵道が爆破される事件が起きたのです。よってわが関東軍では、これは張學良軍の仕業として、これをきっかけとして、ついに全満洲の軍事占領となる転機を作ったのです。日本も支那も國際連盟の加入国として連盟の規約の義務を負っていた。そして支那は、九月十八日に満洲事變が起るや、これを目して九カ国條約及び不戰條約に違反する侵略行為であるとして國際連盟に提訴し、アメリカもまた満洲事變に対し不承認主義（doctrine of non recognition）を採って日本に反対した。これに対し日本側では、満洲事變は中國側の不法行為に対する自衛權の発動であるから、不戰條約に違反していない。また、満洲建國は現地住民の自発的行為であるから九カ国條約に該当しない

と、反駁したのです。このような押問答の末、国際連盟では日本の立場主張を全く取り上げない。かくて一九三三年（昭和八年）二月二十四日、いわゆるリットン報告書を議題とした国際連盟の総会で、投票総数四四、リットン報告に賛成四二、棄権はタイ一国、日本の反対一ということで、日本の主張は全く葬り去られたのです。よって、当時のわが松岡、佐藤の両全権は、直に退場したが、三月二十七日に至り、我国は正式に国際連盟を脱退しました。

これより先、一九三二年二月十七日、全満洲に最高行政會議が設けられましたが、同會議は三月一日、満洲独立の宣言を發し、満洲国の名において独立国家を作り、日本政府は九月十五日、満洲国との間に「日滿議定書」の調印を了して、正式に新国家を承認し、その意義を内外に明らかにしたのです。

そしていま申しました一九三一年に勃發した満洲事變後六年、満洲国が出来てから後五年にあたる一九三七年、すなわち昭和十二年の七月七日に、支那事變が発生するのです。それは、日本軍が北京近郊の蘆溝橋という地名のあたりで夜間演習を行なっていたとき

に、突如として日華両国の間に衝突事件が起きたのが動因となって、支那事変に発展していったのです。この蘆溝橋での衝突についても、実は共産党のたくらみがあって、日支両国のあいだに戦端を開かしめようとする陰謀により、日本軍に最初に発砲したのは、日支両軍のあいだに、たくみに潜入した共産八路軍であり、発砲直後逃亡して、いかにも支那の正規軍が日本軍に発砲したように見せかけて日本軍を戦争に導入したことが、後日明らかにされているのです。

一方、満洲事変とアメリカとの関係については、注目すべき一事がありました。当時のアメリカ國務長官であつたヘンリー・スティムソンの対日態度です。彼は、その著書「極東の危機」の中でも書いていますように、アメリカは支那に特殊の地位をもっている。支那が保全されているのはアメリカの力による。それゆえにアメリカは、支那に対して干渉権をもつ。日本よりも支那の方がアメリカにとって大切である。

等々の方針を明らかにしていました。彼はその著書の全編を通じて、日本を仇敵の如く取り扱っているのですが、その彼は、満洲事変の時、直ちに日本を撃とうではないか、と

時のアメリカ海軍に相談を持ちかけたところ、海軍は、いまのアメリカの海軍力ではとうてい日本の海軍に対抗できない。ワシントン・ロンドン両軍縮会議で、日本の軍艦を縮小させることに会議では成功したが、その実質効果が、会議での決定通りになるには、なお数年の年月が必要で、今のところではなお、日本海軍はアメリカより実力を持っている。といってステイムソンをたしなめた、という話も残っています。

とにかく國務長官がすでに日本を仇敵のように思っているくらいですから、アメリカは満洲事件の真相など、とうていつかんでいるわけはなかったのです。しかし満洲事件は、アメリカの考えのように、果たして日本の侵略主義だと断定できるでしょうか。私は、決してそうではないと断言いたします。そして、満洲事変および満洲国出現の意義が理解できなければ、世界史の新らしい展開についての、新らしいページを開くこともできないと思います。

というのは、満洲建国は、実に満洲の地に移住していた東アジア諸民族が、民族協和と王道楽土の建設を目指して建設された道義国家といわれるもので、満洲の地をして、アジ

ア興隆の基礎たらしめようとするのが、その建国の理想であつたのです。しかも、事こころざしと違い、国際情勢の激変の結果、国史わずかに十三年にして亡滅したことは、まことに遺憾のきわみであつたと思います。満洲・蒙古に移住していったわが同胞をはじめとして、近隣友邦の同志の人達が、心血を絞って満洲の開拓に従事された偉大なる事業の個の内容についてみましても、満洲建国の歴史的意義がハッキリよみとれるのです。老若男女を問わず、まことに純情そのものの心をもって、満洲国において理想国家の実現を期して、尊い生命を捧げ、大きな夢と高らかな誇りを胸にいだいて、困難きわまりない辺境の地に、さまざまの逆境に耐え忍んでおられた人々のことを思いますと、今さらながら、その尊い御霊^{みたま}にたいしまして、憶うだに血涙を禁じ得ない思いがいたしてなりません。

五、第二次世界大戦（一）

第二次世界大戦は、その結果、東亜における英・仏・蘭の支配力が失われ、世界情勢の大変転が来たものですが、なぜこの戦争が発生したのか、その原因の見方については、いろいろの見方があります。その一は、「独・ソ不可侵条約の締結」に、その原因あり、とする見方で、この見方についても、これをスターリンの責任とする説と、英仏に責任を帰せしめるとする説と二つあります。

（一） スターリンの責任だとする説

これは、開戦当時のフランス首相达拉ディエの説です。すなわち、彼によれば、一九三九年五月以来、ソ連は一方において仏、他方において独との、二方面の交渉を行っていた。なぜ二方面の交渉を行っていたかといいますと、その理由は、ソ連はポーランドの防衛よりも、むしろその分割を望んでいたからである。ポーランドの分割問題が第

二次大戦の直接の原因である、という説なのです。

すなわち、スターリンはポーランドの領土支配を意図しており、これがため、取引のために、独のヒトラーと握手したわけであって、両者のこの野合が、ついに大戦の原因になったと見ているのです。すなわち後に述べるように、独・ソ不可侵条約を締結したことが、ヒトラーをして、ポーランドの独立保障を無視してポーランドに侵入せしめ、英・仏をして独と戦わしめたことが、大戦勃発の原因である、という見方なのです。

(二) チャーチルの見解

この見方は、もし英・仏が、ソ連の提議した英・仏・ソ三国同盟案を受諾していたら、二正面作戦を恐れていたヒトラーは、ポーランドの進撃を行わず、歴史のコースは、違っていたかも知れない、という見方なのです。しかし事實は、英・仏がスターリンを信用せず、スターリンの提議した三国同盟案を拒絶しましたから、スターリンをして遂にヒトラーの懷に飛び込ましめ、独・ソ不可侵条約を締結せしめ、ヒトラーの背後を安全ならしめて、ヒトラーの鉾先を英・仏に向かしめるに至った、という見方をしている

のです。

しかしながら、英・仏がいかにソ連を味方に引き入れて、英・仏・ソ三国同盟を受諾させようとしても、ソ連が領土侵略の政策に徹していたことは、驚くのはなく、イデオロギーや友情を棄てることは、弊履^{へいふ}の如きものであることを、まず知らねばならないと思うのです。

すなわち、スターリンは、後にお話するように、英・仏を信用しないこと、ヒトラーを信用しないのと同じであって、ソ連は、英・仏との協定をしても、満足な協定が得られなかった場合には、ソ連がいう侵略者たる独とでも、平気で協定を結ぼうとするのは、明らかなことであつたのです。英・仏がどんなにポーランドに重圧をかけ、ドイツの行動に対して、ソ連軍のポーランド領通過を許そうとしたのかかわらず、ポーランドは、これはドイツの攻撃を挑発するものとして拒絶しています。すなわち、独・ソ不可侵条約締結の三日前、八月二十日（一九三九年）に、フランスは、軍事使節団長ツーマンクをワルソーに派遣していますが、その際ポーランドは、

「ドイツ人との取引は自由を失なう危険を賭するに過ぎないが、ロシア人との取引は、魂を奪われる危険を賭する。」

With the Germans, we risk losing our liberty; With the Russians, our soul.]
と返事をしているのです。これをもってしても、ポーランド人から見ても、ロシアの領土侵略政策がどんなに徹底したものであり、その政策をまともに受ければ、どんなに深刻な事態が予測されるか、その好例と思うのです。

さて、さきに触れた「独・ソ不可侵条約」について少々お話しておきます。これは一九三九年八月二十三日に締結されたのですが、その年の三月二十七日に、すでに英・仏両国は、ポーランドおよびルーマニアに対して、一定条件のもとに援助することを約束していました。

スターリンは、さきにも言いましたように、ヒトラーに対してと同様に英・仏に対しても信用しているわけではないのですから、独と英・仏とを天秤^{てんびん}にかけているようなもので、^{またまた}双股外交をしていたわけです。ところが、英・仏としては、ヒトラーに対抗するため

にはソ連の助力を望んでいたが、同時にポーランドやバルチック諸国を犠牲にしてまでソ連の助力を買い取る意思はなかったのです。これに対してヒトラーのドイツ側には、英・仏のような堅苦しい禁制はなかったのです。

こうした英・仏の立場とドイツの立場の相違がありました。その上、英・仏側は、ソ連が打算外交によってドイツとの間に秘密交渉を進めている事実を、全く知らなかったのです。こうした中でスターリンは、利害を天秤にかけてとうとうヒトラーの申出を受諾するのです。英・仏にとっては、寝耳に水という事態が現出してしまいました。

すなわち、一九三九年八月二十三日、ドイツの外相リッペントロップは、モスコーに飛び、同夜直ちに「独・ソ不可侵条約」と「付属の秘密議定書」に署名してしまうのです。突如としてこの条約が世界に発表されました。日本は、当時、日・独・伊三国同盟問題について交渉中でありましたから、日本の驚きは大変なものです。しかし、その驚きは、日本ばかりでなく、英・仏を含めての世界的な爆弾的驚異を引き起こしました。殊に過去六年間忠実にモスコーの指令下にあつて、猛烈な反ナチズム運動すなわち反ヒトラー運動を

行なってきた各国の共産党は、この条約の発表を聞いて、たちまち大変な困惑に陥いつたのです。ソ連という国は、自己の利害の前には、イデオロギーも何もない国だ、とききはど私が申しました通り、そのことを、この時ぐらいはつきり示したことはなかったのです。ソ連はそれを世界に暴露してしまったのです。

当時日本では、平沼内閣の時でありまして、日本はドイツとの同盟を促進しようとしていて、ドイツとは友好国であったにもかかわらず、ドイツもまた、独・ソ不可侵条約の締結の進行を日本に知らさず、日本はドイツに裏切られたようなことになったのです。あとでこれを知らされた日本は、当時、世上を賑わせた「複雑怪奇」なる言葉を、その「弾劾声明」の中に盛り込んだ声明文とともに、平沼内閣は総辭職を執行するに至りました。當時私は、平沼内閣の内閣書記官長（今の内閣官房長官に当たりますが）でありましたから、日本政府のそれまでの動き方は、よく存じていた一人でした。ですから、この条約が、全く日本を出し抜いた不信に満ちたものでありますし、平沼内閣は、直ちにドイツに對して強い抗議を行ないました。しかし勿論それもあとの祭りでしかなく、「独・ソ不可

侵条約」の性格が、どんなに両当事国の利己主義に徹したものであったか、それを露骨に見せつけられたわけです。

果たして、その条約が調印されて早や一週間目には、ドイツの対ポーランド攻撃が開始されました。そして九月三日、英・仏両国による対独宣戦布告が行なわれ、ここに第二次世界大戦の幕は切って降ろされたのです。この宣戦布告は、ドイツは勿論スターリンの予想にも反したものであったのです。

なおついでに申しますが、この「独・ソ不可侵条約」の「付属の秘密議定書」には、ポーランドの東半分および、ベサラビアおよびフィンランド、エストニア、ラトヴィアがソ連の勢力範囲にはいることになっており、この線以西の領土は、すべてドイツの勢力範囲に入ることになっていたのです。

日・独・伊三国同盟について

欧州における諸国間の複雑怪奇な外交の動きに対して、日本は、この激動する内外に対処しながら、日本の国際的地位を擁護するために何らかの態度に出る必要に迫られたのである。その結果、日本が取った道は、「独・ソ不可侵条約」後一カ年にして、

(一) 日・独・伊三国同盟条約と

(二) 日・ソ中立条約とを締結するに至りました。すなわち、一九四〇年（昭和十五年）九月二十七日（第二次近衛内閣当時）、ベルリンにおいて、「日・独・伊三国同盟条約」が調印されたのです。

ここに至る経過を考えますに、日本は、「支那事変」以来満三年、「満洲事変」から数えますと九年を費して、東洋の安定に努力してきましたが、アメリカに対する交渉その他の事情を見ても、一向に前途の見当がつかないでいました。この局面を開く必要も

あつて、外に友邦国を求め、それがこの条約となつたのです。この条約のお膳立ぜんだてては、わが陸軍によつて進められたもので、その主たる目的は、

日本は、独・伊の欧州における新秩序建設に関しては、独・伊の指導的地位を認め、かつ、これを尊重する。

同時に、独・伊は、日本の大東亜における新秩序建設に関する指導的地位を認め、かつ、これを尊重する。

ということでした。

なお遼きかのほりますが、この三国同盟が締結されるに至つた沿革について、すこしお話しておきましょう。

まず動機ですが、前にも述べましたように、「支那事変」を迅速に処理する必要があること、このために、日・独・伊三国間の政治的提携を強化する方針を樹てたのが、目的であつたのです。この方針が初めて決定されたのは、一九三八年（昭和十三年）七月十九日、第一次近衛内閣当時の、五相会議でした。五相会議というのは、当時の内閣の中、総

理大臣、陸軍大臣、海軍大臣、外務大臣、大蔵大臣の五人の大臣で構成されていたもので、す。この五相会議で決定した方針によれば、

「ドイツに対しては、すでに決定していた防共協定の精神をさらに拡充して、これを対ソ軍事同盟に導き、イタリアに対しては、主として対英牽制に利用しようるように、秘密協定を締結しよう」

ということにあったのです。

この方針を見ても明らかのように、はじめは、対象をソ連に限っていたものでしたが、後になって陸軍の主張で、対象をソ連のみに限らず、ソ連以外も対象にすることとなったために、閣議の意見が分かれて、ついに近衛内閣がたおれ、昭和十四年（一九三九年）一月に、さきにお話しました平沼内閣が成立するに至ったものです。

こうして生まれた平沼内閣ですが、この内閣においても、三国同盟について、陸軍の主張と、外務省・海軍省の意見がなかなか一致しません。従って平沼内閣としても、そう単純に三国同盟に踏み切るわけにはいかず、それゆえに、内外にわたって幾多の交渉を重ね

ていたのです。世間では、平沼内閣の五相會議は、七十余回も開かれたと批評されたほどでした。

こうした折に、さきにお話した「独・ソ不可侵条約」が、八月二十三日に突如として締結を見た、という事態に直面します。このため平沼内閣は総辭職し、三国同盟問題は、ここに清算されることになったのです。すなわち、日本の外交は、新しい出発点に立つに至ったのです。

当時私は、平沼内閣の内閣書記官長でありましたから、平沼内閣の退陣の声明を発表したのですが、その声明文の中で、「欧州の天地は『複雑怪奇』の新情勢を生じ」、と語ったのですが、この言葉が世間の反響を呼び、現在に至るまで、この「複雑怪奇」の語が、喧伝されていることは、皆さんご承知の通りであります。当時新聞記者の質問に対して、私は、「複雑怪奇」とは、「日本人の常識では解し得ないこと」という意味である、と説明し、スターリンに対しては論外のことであるが、ヒトラーの権道外交、不信行為にも一矢を酬いて、日本人の感情を言外に匂わしたつもりであったのです。

当時、前首相の近衛公爵は、私に会見を求められましたので、私は、当時の内務大臣で後に内大臣になられた木戸侯爵とともに、三人で華族会館で会談したことがありました。

近衛公が言われるには、このたびの事件で対独関係を白紙に還したのであるから、これは平沼内閣の手柄であり、総辞職は取り止め、さらにわが外交に新局面を開くべきだと思う、よって総辞職は、思い留まるべきだ、との話でした。これに対して私は答えて、平沼首相の辞職の理由は、外交の行き詰りではありません。ことのここに至ったのは、従来 of 外交を転換しなければならなかったことについて、臣下としての責任、すなわち、臣節に対して、進退を明らかにしたものですから、私から平沼首相に対して留任を申し上げても、それは全く無駄のことだと思えます、とこうご返事したのです。そのため、近衛公は翌日ご自分で平沼首相を訪問され、慰留なさったのですが、やはり効を奏されなかったのです。この間の事情は、近衛公の遺著である「平和への努力」という本に記載されています。

さて、日・独・伊三国同盟の話は、まずはじめに第一次近衛内閣における五相会議で決

定され、その具体的交渉は、いま申したように平沼内閣で打ち切られたのですが、この打ち切りから一年後の、第二次近衛内閣のもとで、急転直下、さきにお話したように、三国同盟が締結されてしまうのですから、まことに感慨無量のものがあります。すなわち昭和十五年（一九四〇年）七月十七日に、第二次近衛内閣が成立したのですが、八月一日に発表された新内閣の「基本政策」によりますと、

「現下の外交は、大東亜の新秩序建設を根幹とし、先ずその重心を日支事変の完遂におき、国際的大変局を達観し、建設的にしてかつ弾力性に富む施策を講じ、以て国運の進展を期す」

ということにあったのです。すなわち、大東亜新秩序建設を根幹とした日支事変の完遂が、日・独・伊間に結ばれた新しい三国同盟締結の目的であった。ということになります。

しかるに近衛内閣は、一方においてあとでお話するように「日・ソ中立条約」を、昭和十六年（一九四一年）四月十三日に、ソ連とのあいだに締結して、対ソ外交に当たったのですが、この意図も空しく、やがて独・ソ開戦を見るに至り、局面はさらに一変するに至っ

たのです。独・ソ開戦は昭和十六年（一九四一年）六月二十二日ですから、「日・ソ中立条約」が締結されてわずか二カ月余りの後に起きているのです。残念なことに、日本はここでも、スターリンとヒトラーに翻弄されるようなハメになったのです。

日・ソ中立条約について

そこで「日・ソ中立条約」についてお話しておきますが、これは一九四一年（昭和十六年）四月十三日に、クレムリンにおいて日本側松岡外相、建川大使と、モロトフ外相とのあいだで調印されていますが、

- (一) その目的とするところは、日・ソ両国は、両国間に平和と友好の関係を維持し、かつ、相互に他方の領土の保全と不可侵とを尊重することを約す、ことにあり、
- (二) その他、この条約には、日・ソ「共同声明書」と、モロトフ外相宛の松岡外相の「機密書簡」とがありました。

(三) 「共同声明書」には、

「大日本帝国は蒙古人民共和国の領土の保全と不可侵の尊重を約し、ソヴェエト社会主義共和国連邦は、満洲帝国の保全と不可侵の尊重を約す」とあり、

(四) 「機密書簡」には、

日本の北樺太における利権の清算に関するもの、その他、国境問題解決のための共同委員会又は混合委員会の設置など、がありました。

こうした情勢に対し、一方アメリカはどういうことをしていたかと言いますと、一九三七年（昭和十二年）十月五日に、ルーズベルト大統領のシカゴにおける演説以来、ますます支那に対する援助政策を強化してきており、一九三九年七月（平沼内閣時代、私の内閣書記官長時代）に、ついに、「日・米通商条約廃棄の予告」を行なったのです。日本に対する経済圧迫の拳に出たわけです。このアメリカの対日敵視政策は、その後次第に激化の一途を辿っていくのです。

アメリカのこの対日敵視政策なるものは、日本の支那事変に対する態度を日本が変更し

ない限り、とうてい変更される筋合いのものではありませんでした。そこで、この際日本の取るべき政策としては、ソ連と協定して日本の地歩を固めると共に、支那との間に寛大にして合理的な条件で、平和を招来せしめる以外には道がなかったのです。

しかるにソ連は、日・ソ間に政治的瞭解を遂げることは、ソ連としての対米、対支關係を悪化させるだけで自分の方としては得るところがなく、これに反して日本の方は、支那事變処理のためにも、また南方に進出するためにも、側面と背後に心配ごとがなくなるのですから、日本にとっては大變に有利な立場になるものだ、とソ連はそう理由づけして、日・ソ中立条約の代償だといって、八月十四日に公文をもって日本に対し、代償を求めて来たのです。その代償とは、北樺太における日本が取得していた利権を解消せよ、などを含む数カ条項でした。

独・ソ開戦について

独・ソ開戦は、一九四一年（昭和十六年）六月二十二日ですが、これより先、イギリスとフランスは、一九三九年八月二十三日に締結された「独・ソ不可侵条約」の一週間後にドイツがポーランドに対して戦争を始めたのに対し、九月三日にドイツに対して宣戦を布告しました。しかし直ちには軍事行動に出なかったのです。ところが、ドイツのポーランドに対する電撃的攻撃とその勝利は、ソ連の方を驚かせ、ソ連は対策行動の自由を取ることになったのです。

かくしてバルカンをめぐる独・ソの対立は、次第に激化していき、さらに、ソ連のベサラビア占領によって、一層險悪化の度を高めていきます。

ドイツの対ソ攻撃は、一九四一年六月二十一日の夜半から開始されました。これによって、スターリンの従来の考え方、すなわちドイツとの間に不可侵条約を結び、欧州戦から

は超然としていようとする努力は、ついに失敗に帰することになるのです。ドイツと英・仏兩國をしてお互いに格闘させ、両方を疲弊させてしまおうとしたスターリンの努力は、失敗したわけです。そしてヒトラーもいよいよ極端にソ連を信用しなくなっていきました。

こうして独・ソが開戦になりますと、アメリカの対ソ援助が決定される、という事態になります。一方、アメリカ大統領は、七月六日に近衛首相にメッセージを送り、日本がソ連の背後からソ連を攻撃しないように、と日本に圧力を加えてきたのです。

欧米の対日嫉視政策と日・米折衝について

ここで私は、日本の対米開戦の切っかけとなった原因、すなわち、欧米の対日嫉視政策と日・米間の折衝についてお話することにします。対米開戦の遠因としては、

- (一) 日清戦争で日本が勝利を収めたことについて、次第に日本に対する警戒心が深ま

り、支那を支配しようとい図していた欧米は、日本の勃興を嫉むようになっていった（当時の陸奥外相が書き残された「蹇々録」^{けんけんろく}参照）。

(二) 日露戦争で日本が勝利を収めたことで、次第にアメリカは対日警戒を深め、やがて明治四十年には、カリフォルニア州の州令において、排日主義の法案を提出し、ついで、明治四十二年には、土地法案と学校法案という代表的排日法案を、明治四十三年一月には、満洲における鉄道は中立たるべしとの提議をなし、日本の南満洲鉄道に関する權益についてさえ異議を提示してきたのです。

(三) これに対して日本は、眼を転じて平和的、経済的發展の行く先として、近くの満洲の天地にそれを求めようとしていたのですが、これまた欧・米・支の合作によってつねに妨害を受け、ついに昭和六年の満洲事変の勃発、昭和十二年の支那事変の勃発を見るに至ったのです。

アメリカ側から、日・米開戦の原因を見る

フーヴァー前大統領が「キャリア」に寄せて言っているのは、

「一九四〇—一九四一年（昭和十五—十六年）聯合国の日本貨物排斥問題が、日本のパール・ハーバー（真珠湾）攻撃の原因である。一九四一年七月二十五日に、対日全面的經濟封鎖斷行の結果は、日本經濟を全く麻痺せしめた。日本は、巨大な失業と窮乏に悩まされるに至った。かくて数カ月後に、パール・ハーバーの攻撃となったのである。」

と、言っているのです。

なお、いま言いました聯合國の対日貨物排斥問題というのは、次のようなことでした。当時よく言われた言葉ですが、欧米諸国は、A・B・C・Dラインによって、対日經濟封鎖包圍攻撃をかけてきた、とよく言われました。A・B・C・DのAとはアメリカ、Bとはブリティンすなわちイギリス、Cとはチャイナすなわち支那、Dとはダッチすなわちオランダのことで、オランダは当時いまのインドネシアを領有していたのです。この英・米・支・蘭の四国の領有地が、海上から日本を包圍している形であり、日本に通ずる海外からの海上通路は、これら四国の領土を縫ってくるわけで、海上から日本の經濟封鎖を狙

うには、A・B・C・Dの四国の包囲でその目的を達することになります。このA・B・C・D包囲体制による対日経済封鎖が、すなわち、フーヴァ大統領が反省する対日貨物排斥問題であり、日本国民の生活必需品のうち、海外からのものは日本に行かないようにする、という人道的にもまことに残酷な政策であったのです。このA・B・C・D包囲体制に追い込まれたことが、すなわちわが国をして米英両国に対する開戦を決意せしめた原因であったことは、もとより言うまでもない明白な事実であったのです。そしてこの経済的包囲攻撃の中でも、特に、アメリカが日本に対して取った諸政策の中に、アメリカにおけるわが国民の資産を凍結したこと、日本に対する石油の輸出を禁じたことの二つは、日本に深刻な打撃を与えたもので、日本国民としては、とうていこれを黙って見過ごすわけにはいかない情勢になっていったのです。

このように日本の対英米開戦の前の、日米交渉の跡を辿っていきますと、やむなく開戦にふみ切らざるを得なかった幾多の経緯を見ることが出来ます。しかし、日本が開戦にふみ切るに至った最後の運命を決したのは、実は、ハル・ノートといわれるアメリカの文

書であつたのです。

このハル・ノートは、一九四一年（昭和十六年）十一月二十六日に、当時アメリカに赴いていたわが野村吉三郎特命全權大使ならびに来栖大使に対してアメリカ政府から手渡されたものです。このハル・ノートは、終戦後になされた戦犯裁判（勝った国々が負けた国の責任者を戦犯として処罰しようとした裁判）で、「東京裁判」と呼ばれているものです。が、この東京裁判で、インドを代表して裁判官の一人となっていたパール判事が指摘したように、このハル・ノートこそ、事実上は、アメリカが日本に対して行なった対日最後通牒（絶縁状）であつたのです。日本はこの通牒を手渡されてから十日以上経過して開戦に至るのです。

そこで、このハル・ノートの内容ですが、

- (一) 日本は多边的不可侵条約を結ぶこと、（米・英・蘭・支・ソ・泰に対して）。
- (二) 仏領印度支那（今日のベトナム地域）に関する多边的条約の要求。
- (三) 日本の海軍及び警察の支那および仏印からの即時無条件の撤退。

(四) 蔣介石政權以外の支那政權の否認。

(五) 日・独・伊三国同盟条約の廃棄。

というもので、これを受け取った岡大使は、愕然としたのも当然でした。

なぜならば、このハル・ノートは、日本に全面的屈伏を強要したもので、わざと日本が承諾し難い事項を、承諾し難い形態を取って押しつけてきたものだからです。どの一つを取って見ても、当時の日本の対外姿勢の正反対を要求しているのですから。もし日本がこのハル・ノートの要求を受諾するとすれば、日本の国際的地位は、満洲事変以前よりも更に悪化したものとなり、やがてはついに日本の存在自身もまた、危殆^{きたい}に瀕するに至ること、あまりにも明白であつたのです。このハル・ノートを手交したハルは、当時のアメリカの國務長官です。いわば日本の首相に近い立場の人です。そしてハルは、このハル・ノートを、日本の野村・来栖両大使に手渡したあと、時の陸軍長官であるスチムソンに向かつて、もはや自分の仕事は済んだ、これからは、君とノックス（海軍長官）の仕事だ、と語り、日本とのあいだに必らず戦争となることを確信しているのですから、事は一層はっ

きりしています。アメリカの陸、海軍も、その翌日、十一月二十七日には、戦時警報を発しているのです。この一事を見ても、アメリカの意図が那辺なへんにあったかを知ることができませんか。

このように事実を正確に辿って見てきますと、アメリカの対日戦というのは、かねてからの計画の下で進められてきていたもので、日米開戦の責任を日本側に取らせ、これを理由に、アメリカの国論の統一を計ろうとしていたのが、アメリカ大統領のルーズヴェルトとその一連の謀略であったのです。この謀略に対して、日本はこれに乗ぜさせられた観があり、かつ、開戦の情報すら、事前にアメリカにキャッチされていたことなどとともに、まことに残念至極なことであったと言うほかはありません。

すなわち、さきにお話したハル・ノートが日本側に手渡された十一月二十六日の前日、十一月二十五日に、大統領ルーズヴェルトは、國務長官ハル、陸軍長官スティムソン、海軍長官ノックス、陸軍参謀総長マーシヤル、海軍作戦部長スタークスを招いて、協議しています。その招かれた一人の陸軍長官スティムソンは、その日記の中で、その時の

協議事項のことを次のように記しています。

大統領は協議の内容を説明した際に、日本は多分来週月曜日、十二月一日にアメリカに攻撃して来るかも知れない。しかも無警告攻撃である。そこで問題は、日本に「最初の一発 (first shot)」を放たせるように、日本を「おびき入れ (maneuver into)」、しかもわがアメリカ側に大きな損害をもたらさせないようにするには、どうしたらよいか、それについて討議するのが、この協議の目的である。

と、ルーズヴェルト大統領が述べたように記しているのです。列席者の重要な一員が書いているのですから、まちがはなく、真相はその通りであったにちがいません。アメリカは、ハル・ノートを日本に渡すと同時に、これを手渡せば、日本はきつと戦争を仕かけてくるにちがいない。すなわち、アメリカの希望するのは、日本を戦争に「おびき入れる」こと、日本に戦争を仕かけさせる、というところにあったことがはっきりするわけです。

一方、ハル・ノートを突きつけられた日本の方は、事態の急迫を自覚し、この上、交渉

を続ける余地のないことを覺り、ついにわが方から戦の幕を切っておとすことになったのです。アメリカ時間で十二月七日、日本時間で十二月八日、ついに日本は米・英両国に対して宣戦を布告し、その早朝、日本海軍の航空隊は、ハワイの真珠湾（パール・ハーバー）の米海軍基地を突如として襲撃したのです。そして、真珠湾に停泊中のアメリカ海軍軍艦に対し、大戦果を挙げたのです。緒戦においての日本のこの大戦果は、ルーズヴェルトが考えていたような、日本が戦争を仕かけてきても、軽微な損害でとどめておきたい、という虫のいい言い分通りにはなりませんでしたが、それにしても、日本の（真珠湾）攻撃によってアメリカ国内の国論を統一しようとした目的は、ルーズヴェルト大統領の思惑（おもわく）通りになったわけで、アメリカでは、直ちに対日戦の国論が統一され、翌日には、上・下両院の合同会議によって、対日宣戦が決議されました。ついで、独・伊がアメリカに宣戦し、これに対してもアメリカは、対独・伊宣戦を行ない、英・蘭両国も対日宣戦を布告することになって、第二次世界大戦といわれる戦争になっていったのです。

六、第二次世界大戦(二)

第二次世界大戦は、日本側は、これを「大東亜戦争」と名づけていましたが、まず緒戦において、日本側が収めた戦果についてお話しします。

一九四一年、昭和十六年の十二月八日、すなわち米・英両国に対して宣戦が布告されたその日に、大東亜各地で、日本の陸海軍はすばらしい戦果をあげたのです。中でもハワイの真珠湾攻撃は、実に驚異的な戦果を収めています。いま、開戦第一日になされた大本営発表にそれを見ますと、十二月八日の午後九時までに発表されたもので、すでに大本営海軍部の発表は、

(一)、帝国海軍は、本八日未明、ハワイ方面の米艦隊並に航空兵力に対し、決死的天空襲を敢行せり。

(二)、帝国海軍は、本八日早朝、ダバオ、ウエーク、グアムの敵軍事施設を爆撃せり。

(三)、本八日早朝、帝国海軍航空部隊により決行せられたるハワイ空襲において、現在までに判明せる戦果左の如し、

戦艦二隻轟沈、戦艦四隻大破、大型巡洋艦約四隻大破、以上確実。他に敵飛行機多数を撃墜撃破せり、わが飛行機の損害は軽微なり。

(四)、わが潜水艦は、ホノルル沖において、航空母艦一隻を撃沈せるものの如きも、いまだ確実ならず。

(五)、本八日早朝、グアム島空襲において、軍艦ペンギンを撃沈せり。

(六)、帝国海軍は、本八日未明、上海において、英砲艦ベトレルを撃沈せり、米砲艦ウェーキは同時刻、我に降伏せり。

(七)、帝国海軍は、本八日未明、シンガポールを爆撃し、大なる戦果を収めたり。

(八)、帝国海軍は、本八日早朝、ダバオ、ウェーク、グアムの敵軍事施設を爆撃せり。

(九)、本日、敵国商船を捕獲せるもの数隻。

(十)、本日、全作戦において、わが艦艇損害なし。

また、大本營陸軍部の発表では、

(一)、わが軍は、本八日未明、戦闘状態に入るや、機を失せず香港の攻撃を開始せり。

(二)、わが軍は、陸海緊密なる協同のもとに、本八日早朝、マレー半島方面の奇襲上陸作戦を敢行し、着々戦果を拡張中なり。

(三)、わが陸軍飛行隊は、本八日早朝来、比島方面要衝に対し、大挙空襲し、甚大なる損害を与えたり

(四)、南支那方面帝國陸軍飛行隊は、八日早朝、香港北方の敵飛行場を急襲し、同飛行場にありし十四機中、十二機に低空銃撃を加え、これを炎上せしめたり、われに損害なし。

また、大本營陸海軍部の発表は、

(一)、帝國陸海軍現地部隊は、本八日早朝、支那にある米租界に進駐を開始せり。

(二)、帝國陸海軍航空部隊は、本八日、緊密なる協力のもとに、比島敵航空兵力ならびに、主要飛行場を急襲し、イバにおいて四十機、クラークフィールドにおいて五十ない

し六十機を撃墜せり、わが方の損害二機。

というものでした。

ついで、開戦二日後の、十二月十日には、マレー半島の洋上で、イギリスが世界に誇る新鋭の巨艦、プリンス・オブ・ウェルズとレパルスの二艦を、わが航空隊の急降下爆撃によつて撃沈してしまいます。イギリスの驚き筆絶につくし難いものがあつたといわれます。その日の大本営海軍部の発表は、次のように報道されました。

「帝国海軍は、開戦劈頭より、英国東洋艦隊、特にその主力艦二隻の動静を注視しありたるところ、昨九日午後、帝国海軍潜水艦は敵主力艦の出勤を発見、以後、帝国海軍航空部隊と緊密なる協力のもとに搜索中、本十日午前十一時半、マレー半島東岸クワンタン沖において、再びわが潜水艦これを確認せるをもつて、帝国海軍航空部隊は、機を逸せずこれに対し勇猛果敢なる攻撃を加え、午後二時二十九分、戦艦レパルスは瞬間にして轟沈し、同時に最新式戦艦プリンス・オブ・ウェルズは、忽ち左に大傾斜、暫時遁走せるもまもなく同二時五十分、大爆発を起し遂に沈没せり。ここに開戦第三日にし

て、早くも英国東洋艦隊主力は全滅するに至れり」。

とありました。翌日、わが航空隊は、その同じ海上に飛来し、敵二艦と生死を共にした英将兵の英霊を悼み、空から花束を投下するという、緊迫のさなかにも、うるわしい心情の発露がなされ、それだけ、緒戦の戦果は、心の余裕を伴ったものであったのです。

越えて、一九四二年、昭和十七年を迎えましても、連日わが軍の勝報が大東亜全地域から陸続として続き、

一、一月二日には、比島の首府マニラを攻略し、さらにコレヒドール島要塞およびバタアン半島の要害による敵に対し、攻撃を続行。

二、二月十五日には、イギリスの東洋における軍事基地であるシンガポールを攻略、セレーター軍港に進入し、これを占領。

三、三月五日には、蘭領印度のバタヴィヤを攻略。また、同日、南部スマトラ一帯の戡定^{かんてい}を完了。

四、三月八日には、イギリス領ビルマのラングーンを攻略。また同日、陸海軍部隊、ニュ

１ギニア島の要衝、サラモアおよびラエに敵前上陸を敢行

しております。

このようにして、開戦後、半年足らずのあいだに、わが国は、フランス領印度支那、タイ、マレー半島、ビルマ、フィリピンおよびオランダ領の諸島を連らねた南東アジア全域を、軍事支配するに至つたのです。

こうなりますと、アメリカもさすがに心配が高ぶり、日本軍の攻撃、とりわけ日本の海・空軍が、太平洋を長駆して、アメリカの西岸、カリフォルニア沿岸までを襲撃して来はしないかと恐れるようになったのです。そうなりますと、もしかすれば、アメリカに移住していた日本人、すなわち日系移民といわれる人々が、日本に内通してアメリカに不利なことをするようになりはしないかと心配になり、ついに十万人以上におよぶ日系移民、すなわちわが同胞たちを、アメリカの西部沿岸の戦略要地から、アメリカ大陸内部に、強制隔離するという政策を実行に移します。

一方、アメリカよりも一層深刻な脅威を受けたのはイギリスでした。イギリスは、日本

が印度を征服しはしないかと恐れていた所、ついにシンガポールまで陥落してしまいましたので、以前からイギリスからの独立を熱望していた印度のことが気になり出します。事実、シンガポールの陥落は、インドの人心に重大な衝撃を与えることになったのです。

こうした状態のもとで、西へ西へと進む日本軍と東に向かって進撃するドイツ軍とが、やがて印度で握手するのだ、というヒットラーの描いた世界戦略も、正に実現に近づこうとする気配を示してきたのです。これをみたイギリス政府は、国璽尚書クリップスを印度に特派し、インドに対して、この戦争が終結したら、必らず印度人の希望している完全独立を許す用意がある、旨の、イギリス政府の方針を、インドに伝達するまでに至ったのです。

こうした情勢のもとと、日本海軍は、印度に対するかの如く、四月五日、突如としてインドの南端に位するセイロン島の首都コロomboを急襲、ついでトリンコマリンを急襲し、イギリス艦隊を撃破するのです。もうこうなりますと、イギリスの恐怖は、さらに深刻化したのは当然で、イギリスもまた、アメリカが、日本海軍のカリフォルニア襲撃を心配し

出していたのと同じく、日本海軍はやがて西印度にまで出撃し、ついにイギリスの死命を制するようになるかも知れぬ、と懸念するようになっていったのです。

しかしながら、このような心境にまで米・英両国を追い込んだ日本軍ではありましたが、その赫々たる戦果も、六月五日の、太平洋上、ミッドウェー海戦における日本海軍の敗北を境として、ついで、八月七日、ソロモン島南部の、ガダルカナル島の敗戦を契機として、この戦局は、急転直下一変するに至るのです。

日本の終戦段階

日本をはじめドイツ側も、ともに緒戦においては赫々たる戦果を収め得たのですが、やがてその戦果も次第に逆転し、ようやく敗戦の色を濃くしていきます。そしてついに、

一、一九四五年、昭和二十年の四月三十日、ヒトラーは追いつめられて自殺するに及び、日・独・伊三国のいわゆる「枢軸国側」といわれた同盟は、まず歐洲においては、最後の運命の日を迎えてしまいます。

二、枢軸国として独り残存して戦い続けた日本も、六月二十三日、ついに沖縄が陥落。アメリカは、日本本土への上陸を示威するに至ります。

三、これより先ですが、日本は、戦勢いよいよわれに不利であることにより、お互に中立条約を締結している国にソ連がありますから、最悪の場合は、ソ連を通して米・英両国とわが国とのあいだの仲介工作をしてもらおう、と前々から考えていました。それでわ

が政府は、その既定方針に従って、ソ連への工作に乗出すことになるのです。

四、六月三日には、箱根の強羅^{ごうら}で、広田（元首相）、マリツク（駐日ソ連大使）会談というのが開かれ、ソ連への依頼がなされます。しかしソ連は日本には色良い返事をしていながら、実行の段になると、引き延ばしの謀略で、一向に進展しません。

五、戦局は一日一日、日本側が不利になっていくので、七月十二日、ついに近衛元首相が天皇に拝謁^{はいえつ}、天皇の親書をいただいて、モスコーに特派大使として出かけることになったのです。

六、こうした万全の準備をととのえて、特派大使のモスコー行きにつき打ち合わせのため、翌七月十三日、モスコーにいる日本の駐ソ佐藤大使が、モロトフ、ソ連外相に会見を申し込んだのに対し、モロトフは、ベルリンに出かけねばならぬという口実で、ロゾフスキー次官に会わせせます。これは、ソ連は日本の敗北に乗じて、中立条約を一方的に破棄し、終戦のどさくさまぎれの中で、対日宣戦を布告し、漁夫の利を得ようとする腹が、すでに決定しており、日本と米・英の仲介の労をとるところか、米・英側に加担

していたからに外ならなかったのです。しかし、日本はそれに気づかず、外交条約を信賴してソ連の出馬を求めていたわけでした。

七、そうこうしているうちに、それから十三日経過した七月二十六日になりますと、「ポツダム宣言」というのが、突如発表されます。あとで判るのですが、モロトフが、佐藤大使の会見申込みを回避した日から四日後の七月十七日から、ポツダム会議は開かれていて、アメリカ大統領トルーマン、イギリス首相チャーチル、ソ連のスターリンらが集まって、対日処理の方策を勝手に決めていたのです。すなわち七月二十六日に発表されたものは、日本に降伏を要求するものであり、それにソ連も加わっているという仕末です。

八、このポツダム会議は、八月二日に閉会されていますが、その四日後の八月六日には、広島に対し、はじめての原子爆弾が投下されました。スターリン、モロトフは、ポツダムから帰国するや、二日を経て、八月八日の午後五時に、モスコー駐在の佐藤大使を招き、それこそ出し抜けに、明日、すなわち八月九日から、ソ連は日本と戦争状態にはい

るべき旨を、文書を読みあげて通告したのです。そして直ちに、ソ連の軍隊を、大挙満洲およびわが北方領土に侵入させ、中立条約を信じて北方を手薄にしていた満洲国およびわが国の北方領土を、たちまちにして占領してしまったのです。

九、なお、八月六日朝八時十五分、広島に対して恐るべき原子爆弾を投下したアメリカは、引き続いて、八月九日、長崎にもそれを投下したのです。

以上でおわかりになるように、玉砕を決意してまで戦う決意のあった日本も、これらのことに直面しては、ついに、戦争の継続不可能を決意せざるを得なくなったわけです。すなわち、

(一)、ソ連の無法な対日宣戦に遭遇したこと。

(二)、アメリカの非道な原子爆弾の使用に遭遇したこと。

の二つが、その原因です。

十、こうした経過を前に、もはや戦争の継続は、全く不可能となり、わが方は、ついに涙を吞んで、「ポツダム宣言」を受諾し、ここに終戦となったのです。

なおついでにお話しておきますが、この第二次世界大戦の途中で、米・英を中心とする
联合国側は、戦時中しばしば、日本に対する重要な協議をしており、その都度、戦後の対
日態度について、联合国側の協定を取り極めていたのです。その四つについてお話しす
と次のようなことになります。

一、カイロ會議—これは、一九四三年、昭和十八年、すなわち日本が宣戦を布告してか
ら、約二年を経過したころ、十一月二十二日から二十七日までの六日間、アメリカ大統
領ルーズヴェルト、イギリス首相チャーチル、中華民國の蔣介石總統の三人の會議でし
た。

二、テヘラン會議—これは、カイロ會議に引き続いて行なわれたもので、翌十一月二十八
日から十二月二日までの五日間、會議の場所をかえ、蔣介石の代わりにソ連のスターリ
ンを入れて、米・英・ソ三国の首脳の會議です。次回に持たれた「ヤルタ會議」では、
蔣介石の名が見られず、「ポツダム會議」でも同じで、スターリンと米・英の三首脳の
會議になつていったことは、きわめて注目すべきことです。おそらくスターリンの計画

が、それを米・英に要求したものと見られたからです。

三、ヤルタ会議―これは、終戦の年、すなわち一九四五年、昭和二十年二月四日から二月十一日までの八日間、ルーズヴェルト・チャーチル・スターリンの三者で、

四、ポツダム会議―これはさきにもお話ししたように同じ一九四五年、昭和二十年七月十七日から八月二日までの十七日間にわたっています。この会議の会合者は、アメリカがトルーマン大統領に変わり、イギリスがチャーチルとアトリイ、そしてソ連のスターリンとでした。

ここで、ポツダム宣言を日本に受諾させるまでの聯合國側の政略を振り返ってみることにします。いまお話しした「カイロ会議」にはじまる四つの会議は、いずれも戦時下の重要会議で、戦後の日本処理について、各国間で基本的協定を取り極めたものでした。

カイロ会議について

まず「カイロ会議」ですが、その最終日の一九四三年・昭和十八年の十一月二十七日に発せられた「カイロ宣言」には、

「日本が一九一四年、すなわち大正三年に、第一次世界大戦で占領した太平洋における一切の島嶼を剝奪し、また、日本が取った中華民国の領土、たとえば、満洲・台湾・澎湖列島などを、中華民国に返還させる。」

ということを記しています。

しかし、この「カイロ会議」においても、中国の蔣介石が、日本に対して表わした好意については、われわれ日本人は、同じ東洋人として忘れてならないことがあります。といえますのは、この「カイロ会議」で、ルーズヴェルト大統領は、天皇制の廃止のことについて、蔣介石の意見を求めたのに対し、蔣介石は、

「日本の起こした戦争の親玉は、実は日本の軍閥である。日本の国体問題は、戦後日本国民自身が解決すべきことであると考える」

と言明したために、日本の国体を改変させる問題は、遂にカイロ会議の議題の対象にはならなかった、という点です。

この蒋介石総統は、一九四五年、日本が降伏しますと、同じその八月十五日に声明書を出し、その文中で、怨に酬^{うらみ}ゆるに徳を以てする、旨を表明しました。この蒋介石総統の態度は、世界史に特筆せらるべき、実に立派な事蹟であったと思います。

また、カイロ会議の最中、ルーズヴェルト大統領は蒋介石総統に対し、中国共産党と共同して一つの連合政府を組織することを希望する旨を言い出しているのですが、このことは、当時のアメリカ人、その大統領でもあった彼が、いかに共産党というものに対する認識を欠いていたかの如実の証拠でもあります。それと同時に、今日の中共政府を支那に実現せしめるについてアメリカも責任の一端を負うべきことを意味していることで、よく注目しておくべき問題だと思ふのです。後に世界のガンになる国共合作が、こうした経緯

をもっていることを、われわれはよく記憶しておくべきだと思います。いまお話しした
ルーズヴェルトのカイロ会議における発言は、彼の倅せがれであるエリオット・ルーズヴェルト
が、その著「父はこう言った」の中に書いていることなのです。

テヘラン会議について

「カイロ会議」が終わりますと、ルーズヴェルトとチャーチルは、直ちにテヘランに飛
んで、スターリンを交えて会談したのです。蒋介石総統を参加させないで、テヘラン会議
を開いたことに注目しなければなりません。それはそれとして、この「テヘラン会議」で
は、欧洲における問題を討議する立て前で会議が持たれたようで、枢軸国側の北フランス
上陸作戦を中心に論議がなされています。しかし、会談中、スターリンは、対ドイツ戦争
が終了した後は、必らず対日戦に参加することを重ねて約束しているのです。ソ連の肚はらの
中は、この時からすでに、日本を裏切ることを決めていたわけです。いま私が、ソ連はテ

ヘラン会議のときに、将来の対日戦参加を「重ねて約束した」といいましたのは、この会議より約一カ月前に、アメリカの国務長官ハルが、モスコーに赴いたときに、すでにスターリンは、そのことをハルに語っているからなのです。

ヤルタ会議について

終戦の年、すなわち一九四五年の二月に開かれた「ヤルタ会議」においては、ソ連の対日戦争参加の問題に関連して、「秘密協定」が結ばれているのですが、この「秘密協定」については、その会議に出席していたアメリカの代表団も、誰もそのことを知らなかったのです。あとになって、アメリカ共和党の右派は、「ヤルタ協定」はルーズヴェルト大統領が、日本と中国とを勝手にソ連に売ったものである、そしてソ連の極東における優勢をそれによって馴致したものである、と非難し、当時の記録の公表を国務省当局に迫っています。一方、ニューヨーク・タイムズは、「ヤルタ会談の文書」を入手してこれを素破抜

こうとしたために、國務省は慌てて、三月十六日午後六時、イギリスの同意をまたずにこれを発表してしまふ、といういきさつがあつたのです。

そこで、問題の、「ヤルタ協定」における対日戦に関する公文書によりますと、一九四五年二月十日、三大国（米・英・ソ）の指導者たちは、ドイツが降伏し、ヨーロッパにおける戦争が終結した後、二・三カ月のうちにソ連は次の条件のもとに、連合国側に立つて対日戦に参加することに同意した旨が記されています。すなわち、その条件というのは、

一、外蒙古（蒙古人民共和国）の現状維持を保守する。

二、一九〇四年、すなわち、明治三七年、日本の背信的攻撃によって侵害されたロシアの諸權益は、次の通り回復されること。

(A) 南樺太およびそれに近接する諸島は、ソ連に返還される。

(B) 満洲の旅順および大連の租借は回復さるべきこと。

(C) 日露戦争以前、大連への通路としてロシアの享有していた東支鉄道および、南満洲運営に関するあらゆる權益は、満洲における完全主権が中国に引き続いて保持される

との了解のもとに、ソ連に回復される。

三、千島列島は、ソ連に譲渡される。

という、実に勝手放題な取極めでした。まさに、アメリカ共和党の指摘するまでもなく、米・英両国は、日本と中国の領土と権益とを餌にして、ソ連を味方に入れようとしたものでした。ソ連もまた、米・英両国の弱味につけこんで貪慾の限りの領土的野心を突き付け、その承諾をとりつけたものです。

この「ヤルタ協定」なるものは、さきにも申しましたように、ルーズヴェルト大統領が独断で秘密文書を作り、國務長官さえも知らずにいた、というもののなのです。この闇取引があったからこそ、ソ連はいまでも、わが北方領土に対してすでに「解決済み」だと主張していること、皆さんご承知の通りです。なんで解決済みでしょうか。日本にとっては、まことに奇怪至極のことというより外に言いようがありません。

ソ連は、この「ヤルタ協定」によって、帝政ロシアが、日露戦争以前に持っていたすべての権益、すなわち、東支鉄道・南滿洲鉄道・旅順・大連などの将来の保有を、すべて獲

得したばかりでなく、当時の帝政ロシアさえ持っていなかった日本固有の領土である千島と、それから外蒙古をも獲取する約束をさせているのです。ただし肝心の日本と中国に対してではなく、アメリカとイギリスの承諾を取りつけた、ということです。

ちなみにお話すれば、千島の北部は、安政元年の条約によって、ロシア領と確認されましたが、明治八年の条約によって、日本領の南樺太と交換してロシア領になったもので、南千島は、昔からずっと日本領でした。こう見てきますと、「ヤルタ議定書」なるものは、日本をして日露戦争前の状態にさせる、といいながら、それ以上の領土の奪取を話し合ったものであることが、はっきりします。なお、「ヤルタ協定」のこの内容は、ソ連の徹底した野望を暴露したのですが、ソ連がこの条件で対日戦への参戦を持ち出したのは、すでに「テヘラン会談」当時からであったことも忘れてならないところです。

さて、いまお話したことで明らかなように、ソ連は日本との中立条約を裏切ったばかりでなく、米・英両国もまた、一時の苦境を切り抜けるために、日本の固有の領土である千島のごときを、ソ連の対日参戦の引出物として提供する約束をしたのですから、これは、

このこと自体が、米・英側が、自ら定めた世界に誇るべき「大西洋憲章」にも反したものであったのです。他国の領土の合併を認めるなどのことは、「大西洋憲章」の否定した事柄であったからです。この米・英両国のやり方は、日本国民にとって今日なお釈然しゃくぜんとしないことであり、同時に、ソ連はもとよりのこと、重要な点において、国際信用を全く失墜するような事をしてしまっているわけです。

なお話が多少前に遡さかのぼりますが、日本は、ポツダム宣言を受諾する約二カ月前の、六月十八日に、極秘裡ごくひりに、終戦準備についての最高戦争指導会議を開いています。これは、敵側がわが国に対して、「無条件降伏」を固執する限り、わが国においても戦争継続の外ないのであるが、それでも抵抗の余力のあるあいだに中立国ことにソ連を通じて和平を提議し、少なくとも、天皇制を維持し得る条件を獲得することが賢明の策である、と判断していたのです。そしてソ連の態度を打診しようとして、いろいろの手だてをしていたこと、さきにお話した通りでありましたが、この試みは、ついに全クムダになってしまったのです。そして、七月十七日からの「ポツダム会議」の開催となり、その宣言は、七月二十六

日に、米・英・中華民國三国の共同宣言となつて、日本にそれを突きつけてきたものです。この宣言の原案の作成はアメリカで、イギリスのチャーチル、中華民國の蔣介石の承認を得、ソ連のモロトフ外相の事後承諾を得たもの、といわれています。

一方、ニューメキシコにおける原子爆弾の実験が成功した、というニュースは、「ポツダム会議」が開かれる前日の七月十六日に、トルーマン大統領のもとに届けられました。そして翌十七日に、ステイムソン國務長官は、その詳報を持ってポツダムに飛び、チャーチルにもその旨を伝えます。すると、この報告を受けたチャーチルは、ロシアの対日参戦をいたく後悔するのです。すなわち、原子爆弾の実験が成功したからには、米・英側は、なにもソ連に対日戦に参加してもらわなくとも良くなったわけです。「テヘラン会議」から「ヤルタ会議」を経て、米・英両国は、ソ連に過大な代償を約束してきています。そんな代償をソ連に約束する必要がなかった、とチャーチルは後悔したのです。

事実この時期近くなると、米・英両国も、すでにソ連が漁夫の利を得るために対日戦に参加しようとしていることを読み取っていました。だからあとで述べますように、トルー

マン大統領は、ソ連の駆け引きを大層警戒するようになっており、日本への進駐軍の総司令官であるマッカーサー元帥に対しても、ソ連のことを念頭に入れ、ソ連に勝手なことをさせないようにとの配慮もあって、マッカーサーに占領政策に対する完全な指揮権と日本占領における完全な管理権とを与えることを決意したのです。日本の管理に関して、ソ連を絶対に参加させてはならないとしていたようです。トルーマンの「回想録」にもあるように、「力だけがロシア人の理解する一事である」と見ていたからです。

こうした米・英側の対ソ態度の推移は、ソ連もまた読み取っていたはずで、事実アメリカが広島に対して原子爆弾を投下するや、バスに乗りおくれないうにとの心底で、時を移さず日本へ宣戦を布告し、日本への攻撃を開始したこと、さきに申した通りです。

このソ連の終戦間^まぎわのどさくさに便乗した一方的な打算外交によって、日本が六月以來二カ月にわたって払ってきた対ソ仲裁依頼工作はもとよりのこと、ソ連との親善関係は、一朝にして葬り去られたのです。

一方、その翌年まで有効であったはずの、「日ソ中立条約」については、ソ連は一言も

触れることなく、これを勝手に破棄蹂躪して、怒濤のような勢いで、赤軍が満洲および北方領土へ侵攻してきました。その双方とも、日本軍は、無防備に近い状況でありましたから、ひとたまりもありません。怒濤の侵攻のままにまかせるより方法はなかったのです。

このように、ソ連の対日宣戦は、日本が倒れる寸前のことで、しかもソ連側の収穫たるや、すこぶる尨大なものであったのです。その上、ソ連は、日本がポツダム宣言を受諾する際には、日本の本土に対してまで、米・英側との分割占領までを企てたのです。その貪慾のあくなきさまは、まさに底止する所なきものごとく、米・英の前にその正体を暴露したのです。

すなわち、ソ連が米・英側に要求したことは次の通りのことでした。それは八月十六日ですが、ソ連は、八月十四日付で取極められた各戦場にある日本軍が、「如何なる相手方に対して降伏するのか」という一般命令に対して、訂正を求めています。それは、

「ソ連に対して降伏すべき地域の中に、宗谷海峡に接する北海道北部を包含させようとするもので、その地域は、釧路から留萌に至り、両市を含む線をもって劃定せよ、とい

うもので、この線の中には、旭川も入ることになるのです。」

これは、ドイツを分割したのと同じように、日本分割の手はじめとして、まず北海道の分轄支配を企てたものです。しかし、このソ連の要求は、さきに申しましたようなトルーマン大統領の方針がきまっていたので、その命により、マッカーサーによって拒絶され、日本は危うく分割の憂き目にあわずにすんだ、という危機一髪のケースでもあったのです。

ポツダム宣言について

さて、ポツダム宣言の内容についても、お話しておかねばならぬと思います。一九四五年、昭和二十年七月二十六日に、ポツダムにおいて、アメリカによる原案作成、米・英・中華民国三国の共同宣言、ソ連の事後承諾というものです。

一、全部で十三項目ありますが、そのうち、

二、第五項において、こう述べています。

「吾等ノ条件ハ左ノ如シ

吾等ハ右条件ヨリ離脱スルコトナカルベシ右ニ代ル条件存在セズ。」

とあり、ドイツの場合の如く無条件降伏を求めたものではないことが明らかなのです。さらに、占領も、地点 (Points) の占領であり、かつ、保証占領であって、広汎な立法・司法・行政などの支配を意味していいこともまた、留意しなければならない点です。

ところが、実際に日本に侵入してきた占領軍は、ポツダム宣言をふみにじり、日本の憲法を勝手に改正してそれを押しつけ、国会の審議を自分の思う通りに進めさせ、そればかりか、日本の教育など、全般にわたって、武力に物をいわせて立法・司法・行政の各般一切にわたって干渉してきました。そのやり方は、まさに傍若無人^{ぼうじやくぶじん}振りを発揮したのです。

そして終戦の年の十二月三十一日には、「覚書」によって、日本の教育教科の**かなめ**である「修身・日本歴史および地理の授業を停止すべき」ことを命令してきたとき、まさに、「日本人の魂」を日本人の心から抹殺しようとした陰謀でなくてなんであつたでしょう。

うか。こうした陰謀計画によって、日本の教育制度を破壊してしまったその影響は、今日の日本の各方面にあらわれてきているのです。

それにしても、そのようなことを規定していなかったポツダム宣言ですが、その宣言文の中の条件には、どんなことが書かれていたか、ご参考までにお知らせしておきます。

(一)、日本国の主権は、本州・北海道・九州および四国、ならびに吾等の決定する諸小島に局限せられるべし。

(二)、日本国軍隊は、完全に武装を解除せらるべし。

(三)、その他、戦争犯罪人の処罰問題等々

でありました。

こうしたポツダム宣言をついに涙を吞んで受諾せざるを得なかった日本政府は、その閣議を、八月九日午後二時から開きました。そしてその閣議では、

(一)、日本として絶対必要条件である国体擁護だけを留保して、この宣言を受諾する。

(二)、右の外に、なお、進駐地、武装解除、戦争犯罪人の三件について、条件をつけるこ

と。

という二つの意見に分かれたのです。そしてこの二つの意見をもとに討議が重ねられたのですが、ついに両意見が一致しないままでおわり、その日の夜十二時、最高戦争指導会議が、天皇の御前で、御前会議として開かれます。

その結果、第一案、正確にいいますと、

「対本邦共同宣言に挙げられたる条件中には、天皇の国家統治の大権を変更するの要求を、包含し居らざることの了解の下に帝國政府は、右宣言を受諾す」

という、天皇の御聖断が下ったのです。そしてひきつづき、八月十日の午前三時から開かれた閣議で、この原案が可決されたのです。ついで、

一、八月十日午前七時、この原案を、アメリカおよび中華民國政府に対してはスイス政府を通じて、またイギリスおよびソ連に対しては、スウェーデン政府を通じて、申し入れたのです。

二、これに対し、八月十二日零時四十五分に、外務省のラジオ室から、右についての対日

回答、いわゆるバーンズ案といわれるものが、発表されます。そのバーンズ回答は、さきにわが方が申し入れた案に対して、諾とも、否とも触れずに、「吾等の立場は左の通りなり」とあり、

「降伏の時より、天皇および日本国政府の国家統治の権限は、降伏条項実施のため、その必要と認むる措置を執る連合国軍最高司令官の制限の下に置かるるものとす」というものです。

三、このバーンズ回答が、果たして、さきのわが方の案を認めたものかどうかについて、閣議は、同日三時から開かれて審議したのですが、どう受けとればよいかについて、閣議の意見はまとまらないのです。

四、翌八月十三日、最高戦争指導会議、さらに四時からの閣議では、鈴木貫太郎首相から名指しによって、各閣僚の意見が求められました。

五、さらに翌八月十四日、定例閣議のため私も首相官邸に出向いたのですが、急に天皇のお召しがあり、御前会議が開かれることになります。そしてここで第二回目の天皇の御

聖断がくだされました。この御前会議の情景は、まさに文字通り、声涙ともにくだる空前の光景を呈したのです。その詳細については、昨年、私が学友会の要望で書きました「建学の精神を語る」という書き物の中に記した通りです。それをよく読んでください。

五、そしてその八月十四日の夜、終戦に際しての詔勅案文の審議がなされ、ついで翌十五日の、天皇の御放送となったのです。その詔勅の中にも、天皇は、「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ云々」と述べられ、日本の国体護持についての思召を、明らかに御表明になつておられます。

七、結　　語

一、古往今来、史上、敗戦で亡国になった例はありません。国が亡びるのは、みな民族精神が頽廃した結果ばかりです。戦争における勝敗は、兵家の常ともいうように、どちらかが勝ち、どちらかが敗れます。しかしただで国が亡びることにはなりません。問題なのは、戦いに敗れたという卑屈感にあります。「資治通鑑」という書物にも、「他屈者克、自屈者負」とあります。日本民族も、この第二次世界大戦に敗れたからといって、卑屈になってはならぬのです。日本民族の統一と勃興の如何は、日本民族の生活の拠点である国体観の如何にあります。

私もその一員であつた終戦の内閣は、ポツダム宣言を受諾するにあたって、唯一つの条件だけをつけた、その条件が、日本の国体護持の一点だけであつたわけも、おわかりいただきたいと思います。日本国体を生活の拠点にしてこそ、日本民族の統一と勃興が期待できるのです。

二、世間では、いわゆる「無条件降伏」であつたといいますが、日本は、決して無条件降伏をしたではありません。国体を護持し得るならば、必らず日本の復興があるに相違ない、と信じたればこそ、それを条件にして降伏したのです。明治維新の志士や先覚者たちの精神にも、それはきつと通ずるものがあると信じます。

この講演の冒頭で述べましたように、学生諸君、どうかくりかえして申しますが、「歴史の教訓をぜひ学んでください。歴史の教訓を学ばねば亡びるのです。」

三、ちなみに、「無条件降伏であつた」という人々が意外に多かったことにも注意してください。徳富蘇峯翁から吉田茂氏に至るまで、そういつていました。まことに遺憾この上ないことと思います。

どうも下手の長談義になつて要領を得たかどうかかわからないけれども、諸君はわが大学の建学精神である自助協力の根性を発揮し、自分の力を頼んで正しい歴史観に徹し、以て祖国日本の復興の動力になつてほしいと思います。

これをもって私の話を終ります。（拍手）

回顧と前進

昭和45年3月15日 発行

発行 亜細亜大学

日本経済短期大学

〒180

東京都武蔵野市境5丁目24番10号

TEL 0422-52-1191 (代)

印刷 株式会社 桜 栄